
年上の彼女

廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
年上の彼女

【Nコード】
N8494E

【作者名】
廉

【あらすじ】
たった1日の誕生日の差で1つ学年が上になった人を好きになった少年。学年が1つ上というだけで好きな人より年上だと感じてしまう少女。一見イケメンで能天気だが過去から抜け出せないでいる少年の担任。密かにその担任教師に想いを寄せている28歳の新任教師。この4人の恋模様を書いています。

1 俺は子供じゃない！

好きな人がいた。

相手は4月1日生まれの大学1年生。自分は4月2日生まれの高校3年生。

たった1日違いの年上の幼なじみだった。

通勤・通学ラッシュの時間、成瀬弘樹^{ひろき}はいつものように駅のホームで待っていた。電車ではなく、人間を。

高校へ行く時間にはまだ早い。だけど、どうしても会いたくていつも早く来てしまう。

「唯^{ゆい}！」

階段を下りてきた私服姿の小柄の女に呼びかける。彼女は少しはにかんだ笑みで小走りやって来た。

「おはよー、ヒロ君。いつも早いね」

大学生になっても特に化粧のしていない菅沼唯^{すがぬま}は、弘樹から見たら他の女子よりずっとかわいかった、なんて口が裂けても言えない。そのことに気づいたのはずっと幼なじみをやっていながらも、高校生になってからだった。

「もう受験生だね・・・懐かしいなあ・・・私も去年経験したよ」

「唯、生物得意だろ？今度一緒に勉強しよーよ」

「教えるのなんて無理だって。そういうのは先生に聞くのが1番だよ」

さりげない弘樹のアプローチを唯は軽く受け流す。たぶん、弘樹の気持ちに気づいていながらも、知らないフリをしているのだ。理由は・・・

「でも、1年先輩として応援してるからね！」

年上だったから。

そもそも唯を好きだと気づいたのは、さっきも言ったように高校生になってからだ。

それまでは幼なじみだったからと言ってまったく意識したことはなかったし、中学のときは同級生につきあっている人がいた。だから、今唯を好きなのが意外なくらいだ。

意識し始めたきっかけはたぶんコイツ。

「おーっす、弘樹！今日もはえーな！」

弘樹の担任であり、唯の兄貴である菅沼克也^{すがぬま かつや}だった。

「弘樹、ちよつと待てよ！」

背後でけられらと笑っている克也を無視して弘樹は校舎に向かって歩いていく。

現在26歳。一見すると、イケメンと呼ばれるほど顔立ちが整っているのだが、性格がとにかく破綻^{はたん}していると思う。

「なんか不機嫌じゃね？もしかして、また唯にそれとなくアプローチしてみたけどスルーされたとか？」

「そんなんじゃないよ！」

まるで図星だったので、弘樹は焦って声を上げる。

「克也こそこんな所でのんびりしてていいのかよ。今日職員会議じゃないのかよ」

「やっべー！先行くわ」

ジャージ姿の男はズボンのポケットに手をつっ込んだまま走り去っていく。

ちょうど周囲にいた女子生徒が克也を見つけてきゃーきゃー黄色い歓声浴びながら。

そんなやや茶髪の男を見送った後、ふと近くに停まっている車の陰に突っ立っている人影が見えた。

「はああ・・・今日もかつこいいなあ・・・」

見覚えのある背格好。確か、今年の春から新しく入ってきた、弘樹のクラスの副担任の玉木有子とかいう人だ。

「玉木先生？」

思わず口になると、彼女は今弘樹に気づいたのか体全体をびくつとさせて驚いた。

「ななななな成瀬君！！！？ななななんでここに・・・！？」

「先生こそ何してるんですか。っていうか、かつこいいって・・・・えっあいつが・・・？」

今さっきまでそこにいたはずの男を思い浮かべる。それは図星のようで、玉木の頬がみるみる真っ赤になっていった。

あんな性格破綻者やめといたほうがいいよと言いつづになったが、なんとかこらえた。

「おおお願いだから・・・誰にも言わないで下さい！このことは内緒で・・・私なんか年上だし、相手にされないことくらいわかってますから」

「っていうか、先生職員会議じゃないんですか？」

「職員会議・・・？え・・・あ・・・ああああ！！！」

先生年上なんだ・・・弘樹が思ったことはそういうことだった。

女の方は年上だということをそんなに気にするのだろうか。

「あ」

「あっ・・・」

同じ電車に乗っていたらしく、弘樹は唯と偶然たまたま駅のホームで会った。

「唯・・・1人？」

「うん・・・まあ」

「途中まで一緒に帰ろうぜ」

「ああ・・・ごめん。私これから寄る所があるんだ。受験生のヒロ君つきあわすわけにはいかなから1人で行くよ」

「まだだ。またスルーされた。いや、これはもう拒絶されたのかもしれない。」

昔も内気な性格だったが、今よりずっと同じ立場として見てくれた。だけど、今は年上の立場でしか見てくれなくなってしまった。弘樹の気持ちに気づいて、それには答えられないと遠まわしに言っているのかもしれない。

「なあ・・・俺のこと避けてるだろ」

駐輪場で唯に話しかける。彼女は少し戸惑った顔をしたが、すぐにぶんぶんと首を振った。

「避けてないよ。なんでそんなふうに思うの？」

「べつつにー・・・なんとなく・・・」

そんなふうに言うのは子供なんだろうと言いながら思った。年上というよりも自分は子供だから避けられているんじゃないだろうか。

「そのセリフ、昔も聞いたことある。かわいいなー」

案の定。思っていたことが確信になる。

かわいいなんて言われたいわけじゃない。1人の男として見られたいんだ。唯にだけは。

「唯！」

人影のない駐輪場に弘樹の声が響いた。すぐ近くにいた唯が驚いて弘樹を見た。

「なに？大きな声出して」

「もう俺は子供じゃない！」

唯の腕を掴み、自分のほうへと引き寄せる。華奢な彼女の体を強

く抱きしめた。

「・・・・・・・・！」

だけど、唯はそんな弘樹のみぞおちに容赦なくパンチをくらわせ、弘樹がひるんだ隙に自転車走り去ってしまった。

「ばかぁー!!」

最後に唯が叫んだ言葉が駐輪場に響いた。

1 俺は子供じゃない！（後書き）

まだ盛り上がってきてませんが、これから
おもしろくなっていく予定です。

気長にお付き合いしてください。たら嬉しいです。

2 弘樹の失恋

放課後の職員室、弘樹は別館にある科学準備室にこもっていた。正確には入り浸っていた。

「弘樹・・・お前唯にフラれるたびにここに来んじゃねーよ」

机に向かって今日やったテストの採点をしている克也は苦い表情で言い放つ。その顔にはたいして視力が悪くなくせに眼鏡をかけている。

「フラれてないし。ちよつと早まつただけ」

「はっ！？いつちよまえにキスしたとか？」

「アホ！そんなことするか！」

本気で怒り出した弘樹を克也はイスをかたーんかたーんと揺らしながらからかう。弘樹にそんなことをする勇気がないことを知った上で面白がっているのだ。

そもそも克也の担当教科は生物だ。生物の先生が誰も使わない、近寄らない科学室にいるところからありえない。ちなみに、科学の先生もこの部屋を使うこともめつたになかった。

「どーせ思わず抱きついちゃったつてところだろ？お前そんなことぐれーでメソメソしてんじゃねーよ」

「・・・してねーよ」

妙に鋭いところも氣にくわない。別に嫌いって言っているわけじゃないが、どうもこっちの事情を全て知っていそうなところが弘樹にとって苦手なことだった。

「まあ、たまには引くのも大事だつてことだ」

「引く・・・？」

「そうすりゃあ、告白なんかしなくなつて自然とつきあえるかもな」
その意味がわからなくて聞き返そうと思ったとき、準備室の扉を遠慮がちに叩かれる音がした。どーぞーと間の抜けた声で克也が反応した。

弘樹も扉のほうを向こうとイスにもたれたら……もたれすぎた。そのまま克也のほうへと倒れこんでしまった。

「あの……菅沼先生……今」

ぶちつと途切れた言葉は玉木先生のものであった。彼女はそこで弘樹と、弘樹に押し倒されている（ように見える）克也の2人を見ることになる。

「あ……あの……」

玉木はそのまま固まってしまい、2人を凝視して動けなくなってしまうた。顔もすぐに赤くなっていく。

「ごめんなさい！！！」

「先生！誤解だから！」

思いつきり誤解されたままなのはごめんなので、弘樹は慌てて走り去っていった玉木の後を追いかけた。

「そうだったんですか……私ったらてつきり……」

どう思えば玉木の考えるような関係になるのだろうか。弘樹はとりあえず事情を説明して玉木の誤解を解いた。

話によると、玉木の年齢は28歳らしい。大学院に入り浸っていたら、いつのまにか同時期に入った友達は卒業していたそうだ。

「先生は克也……菅沼先生のどこが好きなんですか？」

克也を先生呼ばわりすることに気を取られて、配慮の欠片もない質問になってしまった。弘樹がそのことに気づいたとき、玉木は困ったように笑っていた。

「自分でもわかんないんです。理由を並べることもできるんですが……並べたら嘘っぽくなってしまうような気がして……ただ、気がついたら目で追うようになってました」

そこまで言うと、玉木はこの状況に気づいたのか真っ赤になっつぶんぶんと首を振った。

「わっ私ったら……そそそうだ！成瀬君は菅沼先生と仲がいいん

ですね！」

「ああ、まあ。昔からの知り合いっていうか」

そこまで言って、弘樹は昨日の失態を思い出した。

「先生！俺、先生の恋応援しますよ！あいつ、変な性格してるけど根は悪くないし、今は彼女いないみたいだし！」

「彼女・・・やっぱり彼女がいたんですね」

「えっ・・・」

弘樹が言葉に詰まったのは、彼女がいたということにショックを受けた玉木の言葉のせいではなく、克也に彼女がいたのか？ということだった。

弘樹がまだ小学生だった頃、つまり克也が高校生だった頃は、克也はよく女の子を連れていたのでたぶん彼女がいたんだと思う。だけど、最近はどうなんだろう。

そういえば前に1度だけ・・・

何かを思い出しかけたが、目の前にいる玉木がショックでふらふらしていたので、それ以上考える余裕がなくなった。

玉木と別れてからすぐに帰ったが、地元の駅に着く頃には午後7時をまわっていた。別に探しているわけではないが、自然と目がホームを見渡してしまう。唯を探すために。

いるわけがなかった。いつも帰りはたいてい会うことなく、昨日のようにばったり出会うなんてめったになかった。

だけど、半ばあきらめて駐輪場に行くと、なぜか唯がそこにいた。弘樹の自転車の近くで、持っていたバッグを抱え込むようにしゃがみこんでいる。

「唯・・・？」

思わず話しかけると、彼女はぱっと顔を上げて慌てて立ち上がった。

「ヒロ君・・・ごめん、今いいかな・・・？」

「いいけど・・・」

克也の言っていた引くことも大事だということを実行しているわけではなかったが、自然とぶっきらぼうな口調になってしまった。

唯は何か言いにくそうに下を向いて口を開いた。

「ヒロ君の気持ちには気づいてたの」

「うん」

弘樹は自転車の鍵を自分のポケットから探り出す。

「昨日のことも別に怒ってるわけじゃない」

「・・・うん」

自転車の鍵をまわす。

「だけど・・・私には、他に好きな人がいるから・・・」

「うん」

わかっていたんだ。唯は絶対に自分を好きにならないということ
は。

弘樹は何か言おうと頭の中で考えたが、それを言葉にすることは
できなかった。ただ、こくと頷いただけで、自転車に乗ってその
まま唯から離れた。

弘樹は失恋した。

そして、後に弘樹が好きになる年上の少女、坂井真琴^{まこと}と出会うの
は約1週間後、高校の科学実験準備室だった。

その頃、弘樹に応援されたことで勇気が持てた玉木有子は帰りが
けにまだ職員室に残っていた菅沼克也に話しかけた。

「おつかれさまです」

「あ、おつかれさまです」

少し居眠りしていたのか、顔にペンの痕がついている。それでもやっぱりかっこいいとよろよろしながら考えた。

「そうだ、玉木先生」

そのペンでこめかみをかきながら克也は喋る。

「はい？」

「さっきのことは本当になんにもないですよ。弘樹とは昔からつきあいがあるだけで、こんな誤解されたら俺の趣味が疑われます」

「はい。成瀬君から聞きました」

くすくすと笑いながら玉木は答える。ふと、彼女は考えた。

「あの・・・菅沼先生は年上の女と年下・・・どっちが好みですか」
玉木としてはかなり意を決した質問だったが、以外にも克也はあっさりと答えた。にっこりと笑って、屈託なく。

「年上」

目の前がぱあっと明るくなった。そして、今まで考えられなかった妄想をして、なぜだか顔が赤くなるのを感じた。

「じゃっじゃあ・・・これで・・・お先に失礼します」

「おつかれさまです」

顔が赤くなるのを見られないうちに玉木は職員室を後にした。

「年上かあ・・・」

誰もいない職員室を振り仰ぐ。昔の記憶を思い出しながら。

別に年上好きなわけではない。ただ、前に好きになった人が年上なだけで、あるときから自分の時間が止まってしまったのだ。

いつも中途半端だった自分が本気で好きになったたった1人の女性だった。

3 年上のグラサン女

「知らんかったなあ・・・」

失恋してから1週間後、弘樹は科学準備室に呼び出された。もちろん、菅沼克也にだ。

表向きは進路調査票を提出していないからだが、最近の弘樹と唯の関係を聞くために呼び出したに決まっている。

そして、弘樹がようやく重い口を開き、克也が喋った最初の言葉はそれだった。

「俺はずっと唯はお前のことが好きだと思ってた」

「好きな人がいるんだってさ」

克也は白紙の調査票を見て苦い顔をする。

「なんかアレだな。他人事ひとごとだと思えないな」

「は？」

「それよりお前進路どうするつもりだよ。これ提出しなきゃなんないんだけど」

話をそらされたような気がするが、弘樹はすぐに大学の進路について考えた。今までは唯と同じ大学に行ければいいと考えていたが、今ではもうどうでもよくなってきた。

と、そのとき、校内放送で克也の名前が呼ばれた。

「俺が戻ってくるまでには考えとけよ」

克也はその場を去っていった。

克也が出て行った数分後、帰ろうとした弘樹は準備室から出て科学室に出てきたとき、突然その扉が開いた。克也かと思つて見ると、そこにいたのは野球帽にサングラスをかけた女の人だった。

「・・・？」

まず私服姿の人がいることに驚いた。その次に女と目が合ったよ

うな気がしたことに驚いた。

「その少年！」

いつ時代の人間なのか、最初に喋った言葉はそれだった。そして、その薄い唇から風船ガムと思われるものが膨らみ、ぱちんとはじけたとき、もう1度その人は喋った。

「菅沼克也先生はどこ？」

「あ・・・えつと職員室」

面喰らいながらもなんとか答える。それと同時に怪しさのオーラを醸し出している女への警戒心を強める。

「職員室かあ・・・どうしよう・・・」

女はケータイを取り出したが、たぶん時間を確認してすぐに閉まった。

「菅沼先生だったらたぶんすぐ戻ってくるよ」

「本当？ありがとう、成瀬弘樹君」

「え！？なんで俺の名前・・・！」

「さあ、なんででしょう」

心底不思議だったが、女はそれを言うことなく鼻歌交じりに黒板に落書きをし始める。弘樹には読めない字だった。ちなみに、外国語で書かれているわけではなく、単純にその女の字が汚いのだ。

「克也への伝言ですか？」

「伝言つて・・・これ見てわかんないの？『服装の乱れは心の乱れ』って書いたんだけど。あ、これ私が3年のときの学級スローガンね」

「読めないよ」

あつさりと言い放つ弘樹に、その女は怒ったのか乱暴に黒板消しで書いた文字つばいものを消し始める。そして、まるで子供のよう

に怒った顔をしてきつと弘樹を睨みつけてきた、ように見えた。

「私を怒らすと怖いぞ・・・見てろよ」

と、俯いて何かをしたかと思ったら、

「スガヤンに言つといて！また来るって！」

なんとも強い印象だけ残してその女は乱暴に扉を閉めた。

「それ坂井だろ。坂井真琴」

「名前言われてもわかんねーよ。言ってなかったし」

あんまり印象が良くない人の名前を聞いたって興味がわかなかった。

職員室から戻ってきた克也は科学実験室の教卓の前にどっしりと座り、げらげらと笑っている。

「なんなんだよ、あの人。克也の彼女か？」

「はあ？いくら俺でも教え子に手え出すほど飢えちやいねーよ。去年卒業してっただつつの」

「あんなインパクトのある人見たことないけどな」

「いつもグラサンかけてたわけじゃないし。ちなみに、あいつの誕生日って4月1日。唯と一緒に」

絶対面白がつてる・・・それがわかって釈然としなが、弘樹は無視することにした。

「っていうか、本当に知らないのか？坂井のこと」

「・・・？1コ上の人の名前なんて知るわけないだろ」

それこそ不思議だったが、克也がまたげらと笑い出したので悔しくなってしまった。っていうよりも、小さな紙を見て笑っている。

弘樹は気になってその紙を覗き込んで愕然がくぜんとした。

その紙は弘樹の進路調査票で、なぜか第一志望校に県内トップクラスのY大学の名前が書かれているのだ。

「なんだこれ！！」

「よっしゃー！これでクラス全員分そろった」

「待てよ！それ俺が書いたんじゃないし！・・・たぶんさっきの坂井とかいう女が書いたんだって！」

弘樹がさっき坂井の書いた字を汚い字だと言ってしまったことに對する仕返しだということは容易に予想ができた。弘樹の名前を知

っていたのはこれを見たからだろつ。ほとんど勘だろつが。

玉木有子が仕事の合間に夜食を買おうとコンビニへ行ったとき、その周囲に野次馬ができていることを不審に思った。

「はい、オツケー！真琴ちゃん、いいよー！」

真琴ちゃん？少し迷った後、ようやくそれが今ブレイク中のモデルの名前だということに気づいた。

「ほんとだ・・・坂井真琴だ・・・」

同じ女でも惚れ惚れするほどかわいい。夏が近づいてくるからか、涼しげな浴衣姿で歩いている。モデルの撮影現場に出くわすなんて初めてだったので、興奮してしまった。

新任教師のため、去年まで自分の勤めている高校に通っていたなんて全く知らなかった。

唯に会うことを避けて、弘樹は最近早い時間に駅に行っていないかった。

だけど、今日はそのことを忘れていていつもの癖で早い時間に来てしまった。そうして、案の定唯に出くわしてしまいそうになった。条件反射で唯から離れて人ごみに隠れようとすると、今度はどこかで見ることがあるような顔を見てしまった。

「昨日の・・・！」

変なグラサン女と言いそうになりかけたが、なんとか押さえ込んだ。昨日のような格好で、しかしその口元はにやにやと笑っている。

「おや、Ｙ大学を受ける少年じゃないですか。昨日はどうも」

「ええ。あなたのおかげで県内トップを目指すことになりましたよ。今日は偶然ですねえ」

お互いに嫌みをたつぷりと込めて言う。

克也の元教え子だろうと、自分の先輩にあたる人だろうと関係ない。そういうところが子供なんだと思われる原因だと弘樹自身は全く気づいていなかった。

と、そのときだ。坂井真琴とかいうその女は誰かにたまたま押されて前のめりに倒れそうになってしまった。そして、近くにあった公衆電話に顔をぶつけそうになって・・・結果的にサングラスが地面に落ちてしまった。

そのとき、弘樹は見た。サングラスの奥の顔を。

「あんた・・・」

「見ないで！」

慌てて顔を隠そうとする真琴に弘樹はぼつりと呟いた。

「グラサンかけないほうがいいんじゃない？せつかく綺麗な目してるのに」

言った瞬間、がしんと弘樹は偶然たまたまサングラスを踏んづけてしまった。

坂井真琴はサングラスを踏んづけられたことよりも、今の弘樹の一言に驚いていた。

さっき自分が顔を隠したのは、モデルであることを知られたくないからと、もう1つ、左右の瞳の色が異なることを知られたくなかったのだ。

祖母がイギリス人だからか、顔立ちは日本人なのだが、右の目だけが黒みがかかった青色をしているのだ。普段はカラーコンタクトで隠しているが、サングラスをかけているときははずしてしまっていたのだ。

だけど、それを今日初めて綺麗だと言ってくれる変な人を見つけた。

3 年上のゲラサン女（後書き）

あらすじに書いた少年は弘樹のことですが、少女とは真琴のことです。唯ではないんです。

4 真琴のお願い

玉木有子が教員専用の駐車場に車を停めていると、黒い普通車が斜め向かいにバック駐車しているのが見えた。運転席を見てすぐに菅沼克也の車だとわかる。

「菅沼先生・・・!」

克也が車から降りてきたところで声をあげたのだが、それよりも近くにいた別の女の声で遮られてしまった。

「菅沼先生、おはようございます」

「あ・・・尾崎先生、おはようございます」

保健室の尾崎先生。年齢は玉木と同じくらいだが、その抜群のプロポーシヨンが男子に人気の先生だった。そのうえ綺麗で美人だ。

2人は仲良く会話しながら学校へと向かっていく。玉木に気づくことなく。

もしかして、菅沼先生のタイプって、尾崎先生みたいな人なんじゃない・・・

そこまで考えたところで、克也がこっちを見るのがわかった。目が合いそうになる前に慌てて目をそらしたがもう遅かった。

「玉木先生！おはようございます」

「あ・・・おおはようございます・・・」

結局その流れで一緒に行くことになったのだが、明らかに尾崎から邪魔するなオーラが出ているのがわかる。これは生徒の1人から聞いた話なのだが、尾崎は周りから見てわかるほど克也ラブだそう

だ。

「あははー・・・すみません、巻き込んだじゃって」

克也と玉木が受け持つ3年F組の教室に向かう途中、克也は苦笑しながら謝罪する。

最初は何を言われているのかわからなかったが、やがてさっきのことだと気づいて玉木は曖昧あいまいに頷く。

「尾崎先生はなんていうか・・・大人の女みたいで・・・2人で話すの苦手なんですよ」

「そっそうなんですか・・・でも年上の女の人が好きなんじゃないんですか？」

どきどきしながら尋ねる。しかし、克也と目が合った瞬間そのどきどきが爆発しそうになった。

「玉木先生はどうなんですか？」

「え？」

突然質問をされてきよとなる。

「先生は年上と年下、どっちが好きなんですか？」

「わっ私は・・・」

この年で誰にも言えないのだが、いまだに誰かとつきあった経験がない。正確には、大学生のときに告白されたことがある。だけど、玉木自身が相手を好きになることができなくて断ってしまったのだ。「私はどっちでもいいです。好きになった相手が年上でも年下でも関係ないです」

「・・・俺もそんな感じです。関係ない」

そのとき、玉木は優しく微笑む克也の表情を見た。それはとても悲しくて、泣きそうで、きっとその笑顔は玉木には向けられていないということに気づいてしまった。

それと同時に、教室で弘樹の目の下にクマができていることにも気づいた。

坂井真琴に出会ってから、成瀬弘樹は授業のほとんどを寝て過

すようになつた。それには理由があるのだ。

偶然真琴と駅で会い、偶然真琴が人に押されてサングラスを落とし、偶然それを踏んづけたのが弘樹だったのだ。さすがに弁償しなきゃと思つて、サングラスの値段を聞いてみると、

「5万円」

通帳に5万円という数字は入っているのだが、それを下ろすと残金が寂しくなるので、仕方なく知り合いのやつているラーメン屋で働かせてもらうことにした。

そして、10時の閉店まで3時間やっているだけで、ここのラーメン屋は忙しすぎて疲れるということに気づいた。

「いらつしゃいませー！」

働き始めて3日。だいぶ慣れてきた。もともとここのラーメン屋は昔から通いつめていたので、メニューを覚えるなんてことはしなくてよかった。

「はい！味噌ラーメン一丁！」

「はいっ！」

ラーメンのスープをこぼさないように運んでいく。今日はあんまり忙しくない。いつもより客が少ないように思えた。

そのとき、店の扉ががらりと開いた。

「いらつしゃ………」

弘樹の口がそこで止まった。なんと入ってきたのは克也だったのだ。

瞬間的に体が動いて、厨房の奥へと走りこむ。店の大将のもとへと慌てて駆け寄つた。

「大将！克也が……担任の克也が来ちゃった……！学校バイト禁止なんです！」

「おっ！かつちゃん来たのか。久しぶりだなあ」

大将はあごをなでて昔を思い出すかのように懐かしむ。弘樹とし

ては、懐かしんでほしいわけではなく、克也にバイトがバレないようにしてほしかった。

「わかったわかった。今日はそんなに忙しくないし、かつちゃんが帰るまでは奥で休憩してていいぞ」

「ども、大将。お久しぶりです」

大将の声と聞き覚えのあるその声が重なって聞こえた。ぎくつとして振り返ると、厨房に入る一歩手前の所で壁にもたれるようにして立っている克也が見えた。

「久しぶりに大将のラーメンが食べたくなくてさー」

「おうよ！かつちゃんにだったらサービスするぜ」

克也は大将と話し、とにかく弘樹なんて目に入っていないかのようには話し続けた。大将も大将で克也と久しぶりに会えたもんだから、弘樹とのさっきの会話をすっかり忘れてしまっている。

「やっべえ・・・どうしよう。」

例えば制服姿でここの厨房にいたんだったら、大将と話していたと言い訳ができるが、今はここのエプロンをつけている。とても言い逃れができない。

「っていうか、大将と克也の会話にはさまれている状態なので、とりあえずその場から離れることにした・・・が、

「ひーろーきー」

「やけに間延びした声で克也が呼び止める。」

「明日の放課後、科学室に来いや」

「・・・はい」

「やっぱり逃げることはできないようだ。」

翌日のバイトは休ませてもらい、放課後、弘樹は科学実験室を訪

ねた。

いつもは何の遠慮もなく入っていくのだが、今日はおそろおそろ扉をがらをを開ける。すでに中には克也が待っていて、さらに坂井真琴の姿もあった。

「おせーよ。ホームルーム終わってから何分たつてると思ってるんだ」

「悪かったよ。っていうか、なんで2人が一緒にいるんだよ」

「坂井に話は聞いた。お前、わざわざバイトなんかしなくても貯金から5万くらい出せるだろ」

全てお見通しの上で克也は話している。その隣に立つ真琴は、今日は別のサングラスをかけていた。

「ちょうどいい機会だしバイトして金貯めようと思ったんだよ」

「お前なあ・・・高校生はもつとバレないように奥でバイトしろよ。ホールなんかじゃ見つけてくださいって言ってるようなもんだっつの」

怒る論点が他人よりずれているような気がする。弘樹はそう思ったが、克也は地毛であるやや茶髪の髪の毛をぐしゃぐしゃとかいて「俺の授業中に寝るくらいならもう少しバイト減らせ。やめるとは言わねえから」

「・・・わかったよ。大将に相談してみる」

渋々頷くと、何を思ったのか今度は弘樹の頭をがしがしとかき乱してくる。そのまま真琴の前に弘樹を差し出してきた。

「ほら、坂井がお前に話があるつてよ」

「え・・・？はい、なんでしょう・・・」

真琴は気まずそうに俯いていたが、やがて顔を上げた。サングラスをかけていたが、その表情はどこかやわらかいように思える。

「あのさ・・・もうグラサンの弁償はいいから、お願いがあるんだ」「お願い？」

しかし、やわらかい表情から出てきた言葉は予想もしていなかった言葉だった。

「ストーリーカーを退治してよ」

5 ストーカー退治

3ヶ月くらい前に送られてきた一通の手紙。それが全ての始まりだった。

「隠し撮り？」

「そう。そんなのが郵便で1週間に1度届くようになったの。最近
は気持ち悪いから開けてないけど。これってストーカーでしょ？」
坂井真琴のマンションに向かいながら、成瀬弘樹は彼女の話の聞
く。

踏んづけて壊してしまったサングラスを弁償する代わりに、スト
ーカー退治を任されたのだが、話を聞いてもあんまり実感がわか
なかった。

ちなみに、真琴はもともこのことを相談するために克也のもと
へ行つたらしく、何を思ったのか弘樹を退治役を選んだ。

「これが写真」

渡された2枚の写真を見比べてみる。1枚目は今の格好とあんま
り変わりがない。違うと言えば、寒いのかやや厚着をしていること
ぐらいで、いつものように野球帽にサングラスをかけている。2枚
目は・・・カールした栗色の髪の毛を揺らして歩くかなり綺麗な
女の人が写っていた。

「誰これ」

「私だよ」

怒気を含みながら答える真琴。しかし、まるで同一人物だと思
えない服装の違いぶりに、とても信じられなかった。

「へえ。馬子にも衣装とはこのことだな」

「あんたねえ。年上に対する言葉遣いに気をつけなさいよ」

サングラスがざらりと光ると同時に、真琴は立ち止まった。なん
だか高級そうなマンションの目の前で。

「ここが私の家」

まず玄関はオートロック。それだけでもびっくりなのに、部屋も綺麗で広かった。さらに、1人暮らしをしているという。

「大学ってどこに通ってんの？」

「一応Y大学なんだけどね、あんまり行ってないんだ」
「頭いい上に、金持ちなんだ・・・」

事情を知らない弘樹は部屋を無遠慮に眺める。女の子の部屋なんて唯の部屋以外入ったことがないので新鮮だった。

その間、真琴はリビングのテーブルの上にはらりと写真を出していく。これが全部ストーカーから送られてきたものだと思うと弘樹でも気味が悪かった。

写真は真琴がベランダに出ているときと、マンション近くを歩いている姿が多い。

弘樹はその内の1枚を手にとって尋ねる。

「ねえ、例えばこのベランダの写真、どこから撮られたかわかる？」

「・・・たぶん、向かいの公園だと思うんだけど・・・」

ちなみに、この部屋は5階。公園からでも十分写真が撮れる高さだった。

「いつもいつ頃ベランダに出てる？」

「決まってないよ。7時とか8時とか、洗濯物を入れるか出すかのどっちかだもん」

「オッケー。じゃあ俺外で見張ってるから今までどおり普通に過ごして」

そう言っ、何枚かの写真を取って出て行こうとする。そんな弘樹を慌てて真琴は呼び止めた。

「・・・大丈夫なの？」

「うん。心配しなくても大丈夫だよ」
ドアがぱたんと閉められた。

「うう・・・今日も疲れたー・・・」

玉木有子が学校から帰宅し、自宅のマンション専用の駐車場に車を停めた。いつにもまして疲れたその体を引きずるようにしてマンションの玄関口に立つ。

ふらふらとした頭で番号を入力し、オートロックの玄関を開ける。すると、ウィーンと機械的な音を立ててドアが開いた。

そのとき、自分の追い抜いていく人の気配があった。

「・・・え？」

顔を上げると、目の前を小柄な女の子が歩いている。背は低いが、お嬢様のような格好をしている。

いつのまに後ろにいたのだろうか。少し気になったが、それよりもまず自分の体を休めたかったので、そのときは特に気にすることもなかった。

玉木が自分の部屋に戻っている頃、成瀬弘樹は写真のアングルと公園の位置を照らし合わせて、ようやくここだという場所を見つけた。写真はズームされて撮られたらしく、ずいぶん顔がアップになっている。

弘樹は真琴の写真を眺めてため息をついた。

それにしてもかわいい。もしも自分が唯を好きではなかったら、きつと真琴に一目惚れしているところだろう。だけど、簡単に唯をあきらめられるほど弘樹は大人ではなかった。

「・・・！！」

と、そのとき人影を見た。その人物はマンションの明かりのせいで逆光になっていたが、明らかに挙動不審な態度でマンションの前を行ったり来たりしている。

怪しい・・・そう思った弘樹は後先考えずに飛び出してしまった。

「成瀬君！」

本当はその人物の後を追おうと考えていたのだが、飛び出してからわずか3秒で見つかってしまった。しかし、それよりも自分の名前を知っていることに驚いた。しかも、その人物は・・・

「玉木先生？」

「ああ、よかった。違ったらどうしようかと思いました」

彼女は微笑んで駆け寄ってくる。弘樹は混乱してその場に立ち止まってしまった。なんでここに先生がいるんだ？

「こんなところで何してるんですか？」

「いや、先生こそ・・・」

「私の家はそのマンションなんです」

そう言って、玉木は真琴と同じマンションを指差す。弘樹もそのマンションを見上げた。そして、違和感に気づいた。

「・・・！？」

5階の真琴の部屋の電気が消えているのだ。確か、あそこが真琴の部屋だったはずだ。

どこか出かけたのかと一瞬考えたが、弘樹の胸騒ぎは消えなかった。

「先生・・・最近このへんで変な人とか見ませんでしたか？」

「変な人？」

「なんでもいいんです！少しでもあれって思ったことでもいいんです」
「あ・・・変な人っていうか・・・今日帰宅してオートロックの玄関を開けたとき、私の後から一緒に入ってきた人がいるんです。なんかそのことが気になってここまで出てきたんですけど・・・」

まさか！最悪の考えが浮かんできてもう1度マンションを見上げた。あいかわらず消えた明かりを見て瞬間的にやばいと思った。

「先生！玄関開けて！」

事情が飲み込めていない玉木を連れて、弘樹はマンションへと駆け出していった。

弘樹が出て行ってから、坂井真琴はすることもなく1人テレビを見ていた。しかし、間が持たなかったので、仕方なくいつもどおりにコンビニへ行くことにする。

正直、自分の写真を隠し撮りされていると知ったときは怖かったが、今日弘樹が来てくれて、大丈夫だと言ってくれたから少し恐怖が和らいだような気がする。よくわからないが、どうも弘樹と話すと妙な気持ちになる。

世間ではこういうのをなんて言うのか知っている。しかし、真琴は自分が年下の男を好きになるなんて真っ平ごめんだった。

「行こ・・・」

ようやくコンビニへ行こうと考えたとき、部屋のインターホンが鳴る音がした。

弘樹が忘れ物でもしたのかと思って、特に相手を確認することなく玄関を開けた。

「こんにちは」

そこには弘樹ではなく、カメラを手に持つ女の子が立っていた。

5 ストーカー退治（後書き）

基本的には弘樹を主人公にしていますが、
玉木視点で書くことも多いですね。

まあ書きやすいというか……

ちなみに、克也はジョーカー的な役割で書いています。

6 悲しいキス

焦る気持ちを抑えてエレベーターの5のボタンを押す。事情を飲み込めていない玉木も乗せてエレベーターは5階を目指す。

チンという音がし、ドアが開くと同時に弘樹は外に出た。そして、真つ先に坂井真琴の部屋へ向かっていく。

「坂井さん！成瀬です！開けてください！」

ピンポンピンポンとインターホンを鳴らす、中からは返事はなかった。どうやら鍵もかかっているらしく、ドアを開けることも不可能だった。

こういうとき、テレビドラマだったら主人公がかつこよくドアを蹴破ったりするのだろうが、弘樹にはそんな芸当はできなかった。

「あの・・成瀬君、どうしたんですか！？」

いまだに状況が飲み込めない玉木が不安そうに尋ねてくる。

「この中の人、もしかしたらストーカーに襲われてるかもしれないんです！」

「す、ストーカー！？」

驚く玉木を置いて、弘樹はどうしようかと考えた。どうやってドアを壊そうかと考えていたため、管理人さんに開けてもらうという発想が思いつかなかった。

そして、それは玉木も同じなようで、次に彼女が言った言葉はこんなことだった。

「成瀬君、ここ私の真下の部屋なんです。ベランダにある非常用のはしごを使えばこの部屋のベランダには下りられるかも！」

そうして、パニックに陥った人間2人がとった行動は、玉木のベランダから下に降りて、そこから窓を割って真琴の部屋に入ろうというものだった。そんなことをしてストーカーがいなかったら全く

の無駄骨どころか、迷惑きわまりない行動だったが、考えている余裕はなかった。

弘樹は玉木の部屋から消火器を借り、はしごを使って真琴の部屋のベランダに下りる。

カーテンが閉められていて中は見えない。だけど、迷うことはなかった。

弘樹は消火器を窓に投げつけた。

同じ頃、渦中の部屋の中にいた坂井真琴は浴室で小さくなっていた。

見覚えのない女の子が来たと思ったら、急にカメラで自分を撮ってくるし、あるうことか部屋の中にまで強引に入ってきた。連続的に写真を撮ってくるその女の子が怖くて、気味が悪くて、思わず鍵のかかる浴室まで逃げ込んだ。

時々聞こえてくるシャッター音。小さい頃からモデルをやっていたが、この音をこんなに怖いと思ったことはなかった。

怖い・・・怖い・・・誰か助けて！お願い・・・助けて！

目と耳をふさいでうずくまりながら助けを求める。

ガンッ！

そのとき、何か大きな音がした。おそろおそろ目を開けると、浴室のドアに写った影が変な動きをしているのがわかった。それがドアを壊そうとしているのだとわかったとき、真琴の恐怖はすでに限界に近づいていた。

「弘樹い・・・・・・」

呟いて涙する。恐怖の音のほうが大きくて、真琴はそのとき聞こえたピンポンと鳴るインターホンの音には気づかなかった。

何度かガンガンと消火器で殴りつけていると、ようやく一部が割れてそこから手を入れることができた。成瀬弘樹は手探りで窓の鍵を開けて中に入ることができた。

と、足元に黒い物が転がってきた。思わず拾い上げると、

「返して！」

そんな甲高い音が聞こえた。見ると、目の前に自分より年下だと思われる女の子が立っていて、弘樹が拾った黒い物・・・カメラを取り上げようとする。

「弘樹！絶対にカメラを渡すな！」

「は？」

その声はなぜか自分のよく知った声だった。それと同時に、真琴を抱え込むようにしてどこかの部屋から出てきた克也の姿が見えた。

「克也！？なんでここに！」

「いいから！！」

そう言われた瞬間、カメラを取り返そうと女の子が襲い掛かってくる。

状況がいまいち飲み込めないが、このカメラを女の子に渡しちゃ駄目だということはわかる。弘樹はまるで宝物でも守るかのようにそれをかばった。

「・・・・・・・・！！」

男と女、身長之差もあつてか、やがて女の子はカメラを取り戻すことをあきらめた。そして、弘樹をキツつと睨みつけた後、後ろにいた克也のほうを向いた。

「なんで・・・なんで私の邪魔をするの・・・」

克也は答えずにただじつと女の子を見る。

「私はただ、坂井真琴を撮りたかっただけなのに」

ストーカーはまだ10代の女の子だった。

何が理由かは知らないが、真琴の写真を撮っては自宅に送りつけていたらしい。

彼女は部屋の中央で何も言わずにうずくまっている。少しして、克也が彼女に近づいていった。

「克也はどうやってここに入った？」

空気を読めない質問だが、気になるものは仕方がない。しかし、逆に克也は心底不思議そうに答えた。

「どうやって・・・玄関から普通に」

「鍵閉まっただろ」

「だから鍵開けて」

「管理人さんに開けてもらったのか？」

「いや。俺この部屋の保証人になってんだよ。だから坂井に鍵もらった。使ったの初めてだけど。だいたい自分の生徒だけでストーカー退治なんかさせるかよ」

なんだそれ。それなら自分の今までの苦労はなんだったのだろうか。急にがつくりと力が抜けて弘樹はその場にへたり込んでしまった。っていうか、なんで元担任が元教え子の部屋の保証人になってんだよ。

「そういう弘樹こそどうやって窓から入ってきたんだよ。まさか屋上から下りてきたんじゃないだろうな」

「ここの真上が玉木先生の家で、ベランダの非常用のはしご使って下りてきた」

「え？玉木先生家ここなの？」

まるでまずいことにでもなったかのように苦い顔をして克也は頭をかく。やがて、1人で頷いたかと思うと、傍にいる女の子を立たせた。

「この子、家まで送ってくる」

「警察は？」

「いや、いいわ。俺がなんとかする」

克也がなんとかするって言うときは、本当になんとかしてくれる

と昔から知っていた。弘樹はそれを信じて黙って頷いた。

後に残ったのは弘樹と、部屋の隅でうずくまる真琴だけだった。どうするべきかと悩んでいたら、いいのか悪いのかよくわからないタイミングでベランダのはしごから玉木先生が下りてきた。

「先生」

「あ、あの、大丈夫かなって思ってた・・・」

そこまで言って、玉木は弘樹の言葉に反応した真琴と目が合った。
「さっ坂井真琴！」

声を上げた玉木がなぜ真琴を知っているのか弘樹は気になった。

玉木は今年から赴任してきたはずだ。

「先生、坂井さんのこと知ってるんですか？」

「だって超有名なモデルさんじゃないですか。まさか、そんな人が私の真下に住んでいたなんて・・・」

「モデル・・・？」

初耳だった。一瞬玉木がからかっているのかと考えたが、本人の様子を見る限りそういうわけではなさそうだった。

弘樹は改めて真琴を見ると、また下を向いてしまっている。そして、小さく呟いた。

「・・・怖い・・・」

弘樹は真琴の傍に近寄った。

「シャッター音が怖い・・・私・・・モデルができなくなったら、なんにもなくなっちゃう・・・誰からも必要とされなくなっちゃう・・・どうしよう・・・」

それは、いつも弘樹よりも年上として振舞っていた彼女が初めて見せた姿だった。

見ていて悲しくなった。どうすることもできない自分が悔しかった。ゆつくりと彼女の肩に手を置き、髪の毛をなでることしかできなかった。慰めの言葉も浮かばなかった。こういうとき、なんて言

うべきなのか弘樹はわからなかった。

だから、真琴がじつと弘樹を見つめてきてゆっくりと唇を重ねてきたとき、弘樹は当たり前のように受け入れた。

7 シャッター音

ストーカー事件の2日後、その日発売された雑誌には『モデルの坂井真琴、体調不良でダウン！芸能活動無期限休止か』と書かれてあった。

大学生向けの雑誌をめくってみれば、真琴の姿はいっぱい目についた。そういうのに疎か^{うそ}った弘樹だけが知らなかったようだ。

学校でその雑誌を見ていると、友人の1人が声をかけてきた。

「よっ！弘樹が雑誌見てるなんて珍しいな」

「なあケンちゃん、坂井真琴って知ってる？」

「当たり前だろー！俺らの先輩なんだぜ？その上美人で超かわいい」
知らなかった。実際に名前を聞いてもぴんとこない、普通に私服を着ている写真を見てもぴんとこない、高校に2年ちよつと通っているが、弘樹はその存在すら知らなかったようだ。

「ぼーっと考え事をしていると、ケンちゃんは弘樹のしている雑誌をひょいっと手に取った。」

「やっぱあれだけ売れてると体調不良になるだろうな」

雑誌には、芸能活動を無期限休止するかもしれないと書いてある。このままだと休止してしまう可能性が高いだろう。だけど、本人はどう思っているのだろうか。本当にモデルをやめたいと思っているのだろうか。

弘樹にはわからなかった。

昨日欠勤した菅沼克也がいつもより少し送れて職員室に入ってきて、何人かの先生に風邪は大丈夫かと心配される中、玉木有子は克也の視線に気づいた。保健室の尾崎先生との長い会話を終えて、ようやく玉木の隣である自分のデスクまでやって来た。

「玉木先生・・・会議が終わったら少しいいですか？」

「あ・・・はい」

その内容はなんとなくわかっていた。

「一昨日のことなんですけど・・・」

克也は言いにくそうに切り出したが、玉木はわかっていたので頷いて先を促した。

「玉木先生に迷惑をかけたこと、まず謝ります」

「そんな・・・！迷惑だなんて思ってません」

玉木のその一言で安心したのか克也はほっとした表情になる。場違いにどきどきしてしまいそうになるのを慌てて堪えた。

「それで、できればこのこと誰にも言わないでほしいんです」

「それは大丈夫ですけど・・・菅沼先生は本当にそれでいいんですか？」

何気ない質問のつもりだったが、克也は少し目を見開いて固まっていた。何がそんなに驚く質問だったのだろうかと玉木は考えたが、やがて克也が苦笑したのでますます玉木は混乱してしまった。

「なっなんですか・・・？」

「いえ。前に同じことを言ってきた人がいるんです。久々に思い出したら懐かしくなってます」

玉木がその人物の存在を知るのもう少し先になる。

今の克也は玉木の口止めが目的だったらしく、それを確認すると職員室に戻っていった。

翌日は土曜日だったが、バイトが午後からだったため、成瀬弘樹は午前中の間に坂井真琴のマンションへ行ってみた。

しかし、マンションの入り口でインターホンを押してみても応答

がなかった。

「いない・・・か」

仕方なくあきらめて踵きんすを返すと、

「わぁっ!!」

いつのまにいたのか、背後に坂井真琴の姿があった。

「びつくりした・・・いつからいたんだよ!」

「今さっきからずっとここにいたよ。なんか用?」

「用?ええっと・・・」

何しにここへ来たのだろう。目の前の野球帽グラサン女に会いに来たのは確かだが、会ってどうするつもりだったのかはわからない。しばらく迷った末、弘樹は選んだ言葉は、

「たまたま近くを通りかかったから」

「ふーん、そう。それじゃあグッバイ、少年」

真琴はそっけなくマンションへ入っていき、暗証番号を押して入り口のドアを開ける。弘樹は後を追うこともできないでしばらく真琴の後姿を見送っていたが、やがてあきらめてその場を去ろうとした。だが、

「ねえ!」

真琴の行動は本当にいつのまにかが多いと思う。とにかくいつのまにか少し離れた所に立っていた。

真琴の提案で弘樹たちが向かった所はカラオケだった。

さっきからエンドレスに歌い続ける真琴は最近のヒット曲から口ツク、演歌までなんでも歌えた。

「ホラ!少年も歌いなよ」

「っていうか、その少年ってやめろよ。俺と坂井さんって1コしか違わないんだし」

「・・・十分年上じゃん」

「4月1日が誕生日だって聞いたけど・・・俺、その次の日。全然

変わんないって」

「たった1日の誕生日の違いでも、学年が違うと変わってくるんだよ」

やっぱりわかんない。たった1日の違いでそこまで変わってくるのだろうか。以前ケンちゃんにそれとなく聞いてみたが、『気にしない人のほうが多いんじゃない？1日だろ？でも、中には年下は絶対やだっていう人もいるんだよな』と答えられた。

「なんか俺、坂井さんのこと全然知らないんだな。正直、モデルやっただけとも知らなかったし」

「私の知名度もそんなもんだっただけで思い知ったよ」

「モデルやめるの？」

やっぱり弘樹はこういうのは苦手だった。だから、ストレートにものを言ってしまうことしかできなかった。

「止めるの？他のみんなと同じようにそんなのはもったいないとか言って」

どこか自嘲するかのようにつ真琴。弘樹は彼女を見てふるふると首を振った。

「止めないよ。やめてほしくないけど、それが坂井さんが死ぬほど考えて決めたことなんだっただけ」

何を言うべきか、何をしてあげるべきか、全然わからなかったから、弘樹は真琴の選んだ道を応援することにした。

真琴は固まって動かなくなってしまった。その間、弘樹はコブク口の曲を入れた。

「じゃあ、俺・・・そろそろ行くから」

バイトに行くため、昼の1時頃にマンションの前まで送っていった。カラオケでの弘樹の一言から真琴は一言も話さなくなった。

たぶんもう会うことはないんじゃないかと思う。真琴はもうこのマンションには住まないらしく、しばらく親戚の家に行くことにな

るかもしれないと克也が言っていた。会えないのは寂しかったが、今の真琴にはそれが1番だとも思う。

「ねえ！」

真琴が呼び止める。

「最後にお願ひがあるんだけど・・・私の写真撮ってくれない？」

そう言つて、持っていたバッグの中から使い捨てカメラを取り出す。それを弘樹に渡して、真琴はマンションの目の前にある公園へと歩いていく。

弘樹も彼女の後を追いつながら、使い捨てでもシャッター音は聞こえるだろうなあと考えていた。

「いいの？怖くないのかよ」

真琴は頷いた。

その後、1回だけのシャッター音が響いた。

月日がたち、夏休みが近づいてくる頃、坂井真琴はモデルとして復活していた。体調不良から何事もなかったかのように仕事に専念している。

成瀬弘樹は科学実験室でその雑誌をめくっていると、不意に後ろからひよいつと本を取られてしまった。

「なにすんだよ！」

「へー・・・上手く撮れてんじゃん。さっすが俺の教え子」

何の関係があるのか知らないが、克也はまるで自分のことのように喜んでゐる。そんな克也の様子を見て、ふと弘樹は疑問に思った。

「なあ、克也と坂井さんってどんな関係なの？」

「元教え子だつつつてんだろ。つていうか、それこっちのセリフ。結局お前らどこまでいったんだよ？」

「なんもねーよ！あれから会ってないし」

キスしたんだから何もなかったわけではないが、それっきり会っ

ていないのも本当だった。お互いの連絡先もケータイのアドレスも知らない。つきあっているなんてもつてのほか。第一、弘樹はまだ唯のことが忘れられないでいるのだ。

「まあ夏休みだし、これから会えるんじゃないの？」

克也の言葉に弘樹はあることを思い出した。

「夏休みつていや・・・姉ちゃんが久々に帰ってくるんだった」

今年28歳になる弘樹の姉。この言葉を聞いて、克也が固まってしまったことを知る者は誰もいなかった。1番近くにいた弘樹でさえも・・・

7 シャッター音（後書き）

これにてストーリーカー編終了です。

あの女の子はどうなったんでしょ？

克也が『なんとかした』と思いますが……

で、次はその克也の昔話を少しだけ……

8 それぞれの『久しぶり』

明日の夏休みを目前に控えた終業式が終わり、3年F組は一気にハイテンションになっていく。その中でも特に盛り上がった男女が勝手に企てた計画が、『菅沼先生んちでバーベキュー』だった。

「えっ！？マジマジ？やりてー！」

これが受験生の先生だとは思えない。この教師は生徒の意見にノリノリになってバーベキュー計画に乗っていく。

成瀬弘樹は教室の片隅で彼らの会話を聞きながら、半分は自分に関係ないものだと思っていた。もし自分が克也の家へ行ったら、唯に会う可能性がある。今までどおりに話したいのだが、たぶん気まぐずくなってしまうのがオチだった。

「よっしゃ！じゃあ、夏休みに超暇なヤツは俺んち集合！特別に参加費はタダにする！知らない友達とかも誘っていいぞ！」

克也の一声に、わぁっとクラス中が歓声に溢れた。

結局、その後行きたい人だけ黒板に名前を書くことになり、帰りがけに弘樹が見ただけでクラスの半分以上がバーベキューに行くことになっていた。

「来るよな？」

科学実験室で宿題をやっていると、まるで当たり前なことを確認するかのように克也が尋ねてきた。

「なに？」

「バーベキュー。大勢いたほうが楽しいだろ？」

「行くかよ。それでも受験生なんだよ。そんなことやってる暇なんてないし」

つつけんどんに言っていると、克也は指で赤ペンをぐるぐる回しながらキャスター付きのイスを転がして弘樹の傍までやって来た。

「顔出すくらいならいいだろ。まあ俺としては、弘樹が来なかったらこないだお前と坂井がチューしてたこと話せるからいいんだけど」
「・・・！なんで知ってんだよ！？」

さすがに恥ずかしくなつて大声で反抗すると、克也はニヤニヤと笑つて、

「玉木先生から。あの後どうなりました？つて聞いたら教えてくれました。あー夏休みが楽しみなねえ・・・」

完全に面白がる気であるこの性格破綻者にとうとうあきらめて弘樹はため息をついた。

「わかつたよ。行くから・・・行くからそのことは忘れるよ」

克也は答えずに自分が元いた場所へ戻つていく。嫌な感じた。

「あつ！玉木先生、ちよつといいですか？」

職員室から出た直後、ちようど廊下にいた弘樹に言われて玉木有子は人気のない印刷室へと連れ込まれた。その尋常ではない様子に、何かトラブルでもあったのだろうかとか心配になつてしまった。

「成瀬君・・・？どうしたんですか？」

「あの・・・こないだの・・・．．．．．だあああ！もういいです！！」

なんだかよくわからないが、何かを言いたかったが途中でそれをやめたというところだろう。弘樹は深々とため息をついて玉木に向き直る。

「先生はいつ克也に告るんですか？」

その言葉のほうがよっぽど衝撃的だった。

「ここに告るなんて・・・！そんな滅相めっそうもない！むむ無理です・・・」

「あいつ、絶対自分から告白なんてしませんよ。今までずっとそうだったみたいだし」

「そっそうなんですか・・・」

やっぱりあれだけかっこいいだけある。自分から告白したことがないなんてまるでドラマやマンガの世界の話で、玉木には想像できなかった。

だけど、告白なんてできない。だって玉木は自分がフラれてしまうことがなんとなくわかっていたからだ。克也は玉木や保健室の尾崎と話しているとき、目の前の相手ではないどこか遠くの人を見ている気がするのだ。

「今度、克也んちでバーベキューやるみたいです。先生も行こうよ。克也と話せるかしんないし」

「はい・・・絶対行きます！」

それでも少しでも克也と話せる機会があるのなら絶対行きたかった。玉木はまるで子供のように顔をほころばせながら何度もこくと頷いた。

8月のお盆前、クラスメートがそれぞれに持ち寄った食材でバーベキューが行われた。

菅沼家の庭は思った以上に広い。クラスの半分以上が集まってバーベキューするのに十分な広さだった。

「よっしゃー！肉焼くぜー！」

成瀬弘樹が到着した頃にはすでにバーベキューは始まっていた。みんな食材を持ってきていることに驚きながら、自分は率先して肉を狙った。どうせタダならとたらくく食べまくった。くどいようだが、弘樹は何も食材を持ってきていない。

一段落ついてふと辺りを見渡すと、知らない人も大勢いることに気づいた。その中に唯がいるかもしれないなど、どこか他人事のように考えた。

と、そのとき、弘樹の座る隣のイスに座ろうとする気配があった。

無意識にその人物を目で追って・・・驚いた。

「久しぶり」

野球帽に、今日はサングラスではなくて黒縁眼鏡をかけた坂井真琴だった。彼女は焼肉のタレの入ったアルミの皿を持って弘樹に笑いかけた。

「スガヤンに誘われたんだ。バーベキューやるから暇だったら来な
いかって」

「暇だったんだ」

「今日は午前中で終わり。っていうか、来たかったから何も入れなかったの」

そう言っておいしそうに焼肉を食べる。暗くなってきたので、彼女が坂井真琴だと気づく者はいないようだ。だから、サングラスをかけてこなかったんだろう。

「少年にお礼しなきゃだもんね。今度ご飯でも奢おごらせてよ」

まるでデートにでも誘われているかのように思えて弘樹は照れくさくなってしまった。慌ててなんでもない素振りでこくと頷いておく。それでも真琴の視線を感じて、挙動不審にあさっての方向を見ようとした。

「あ・・・」

思わず固まった。そこにはここ3ヶ月間、ともに顔を合わせていなかった好きな人の姿があったのだ。唯も弘樹に気づいているようで、目が合った瞬間、露骨に顔をそむけられた。

「ごめん。俺ちよつと・・・」

「えっ・・・弘樹！」

初めて名前で呼んでくれたことにも気がつかずに弘樹は飛び出していた。どうしても唯と話したくて・・・

会って何を話せばいいのかわからない。ただ唯を困らせるだけなら行かないほうがいいのかもしれない。だけど、この足はもう止まらなかった。

「唯！」

菅沼家の玄関前でようやく呼び止めると、唯はおそろおそろ振り返った。その表情はなんだか気まずそうだった。弘樹は唯に会いたがために早起きしていた自分を思い出した。例え失恋したいたとしても、唯とはこれからも仲良くしていきたかった。

だから、自然と笑顔になって言うことができた。

「久しぶり」

「せんせー！弘樹のヤツ酔いつぶれてまーす！」

一部の男子に抱えられた弘樹の表情を見て、菅沼克也はまず何があったのか知りたくなった。顔はお酒を飲んだ後のように真っ赤で文字通り酔っているんだろう。

「誰だー？弘樹に酒飲ましたヤツはー？」

「俺たち止めたんだけど・・・1人で勝手に飲みまくって・・・」
彼らが嘘を言っていないことくらい目を見ればわかる。克也はやれやれとため息をついて生徒たちから弘樹の体を預かった。

「家近いし、送ってくるわ。ちよつと留守にするからよろしくな」
「了解です」

車のキーをポケットから取り出し、ボタンで鍵を開ける。弘樹は完全に酔いつぶれているらしく、今は声をかけても起きない。そんな弘樹を後部座席に寝かせて自分は運転席に乗り込んでエンジンをかけた。

酒の持ち込みは禁止と言っておいたので、弘樹が飲んだのは克也の家の冷蔵庫にあったビールだろう。なんだってそこまでして飲む必要があったんだろうか。

車は程なくして住宅街に入り、克也は目的の家の前で車を停める。弘樹を起こす前に先に事情を家の人たちに説明したほうがいいだろうと考えて、インターホンを押しかけた・・・そのときだった。

特に何の音もしなかったが、気づいてしまった。

すぐ傍に人がいることに。

そして、それが誰であるかということも。

「・・・久しぶり」

克也はゆっくりとその人物を見て呟いた。

「亜紀^{あき}・・・」

弘樹の姉の名前を。克也にとって世界で1番好きだった人の名前を「・・・」

8 それぞれの『久しぶり』（後書き）

ラブコメに書こうと思ってたんだけど
どんどん地底近くに沈んでいつてる気が…
すいません…

このバーベキューもう少し続きます。

9 克也の過去

「え．．つと、弘樹どうしたの？」

しばらくの沈黙の後、その重みに耐えかねたように亜紀が言葉を紡ぐ。対する菅沼克也は何かを考えていたわけではないが、ぼーっとしてしまった自分に気づいた。

「間違つて酒飲んだみたい」

「そつか．．じゃあ部屋で寝かせとくね」

1人で運べるのかと不安になったが、亜紀は簡単に弘樹をおんぶしてしまった。克也は昔、怪力女と呼んでいた頃を思い出した。今、もし昔に戻るのなら、あの頃に戻りたい。もちろんそんなことは不可能だと知っていたが。

「じゃあ．．」

「あ、かつちゃん」

そのあだ名で呼ばれるのも実に8年ぶりだ。条件反射で体が反応して克也は立ち止まった。

「弘樹を送ってきてくれてありがとう」

「．．ん．．」

振り返らずに頷いた。

玉木有子が菅沼家に到着したときにはすでに8時をまわっていた。たまたま今日が学校当直の日で、不器用な玉木はモタモタしてなかなか仕事が終わらなかったのだ。

しかし、着いてみてすぐに克也がいないことに気がついた。

「あの、後田君^{うしろだ}。菅沼先生どこにいるかわかりますか？」

「先生なら酔いつぶれた弘樹を送ってたよ」

生徒の1人、後田賢^{けん}が答える。

「酔いつぶれたって・・・成瀬君お酒飲んだんですか・・・」

「なんかヤケ酒みたく一氣にがーって」

後田がそこまで言うのと、車のエンジン音が聞こえてきた。振り返ると、車庫にバック駐車している克也の姿があった。

今しがた克也に起こった出来事を知らない玉木は心臓の高鳴りを抑えて車庫へと向かった。

「あれ、玉木先生！お疲れ様です」

普段どおりの明るい声、表情で車から降りてきた克也は笑顔で玉木を出迎えた。しかし、なぜかいつものその顔が少しだけ元気がないように見えたのは玉木の気のせいだろうか。

「いえ・・・すいません、私も参加しちゃって・・・」

「大勢のほう楽しいじゃないですか。あつ、玉木先生ってビール飲めます？」

「はい。少しなら・・・」

「じゃあ一緒に飲みませんか？」

玉木の返事を聞かずに家の中に入っていく克也。やっぱり何かがおかしいと頭半分で思いながらも、もう半分でビールが飲めると言った自分を後悔していた。どうも自分は酒が入ると説教くさくなるらしいのだ。

生徒たちが手持ち花火をやり始めた頃、庭の隅にあるイスに座り、玉木は克也と一緒にビールを飲んでいた。なるべく酔わないように少しずつ少しずつ飲んでいたが、逆にハイペースで飲んでいく克也のほうに気になってしまった。

「菅沼先生、あんまり飲むと明日二日酔いがひどくなりますよ・・・？」

「明日は休みなんで大丈夫です」

すでに缶5つ目。玉木だったら酔っている頃だ。

目の前では、生徒たちが楽しそうに花火をしている。ちゃんとバケツに水を用意しているところがえらいと思う。

と、そのとき、隣の克也が6本目のビールを開けようとしていることに気づいた。

「もうやめてください！これ以上はだめです！」

「飲まないとやってられないんすよ」

それでも玉木は強引にビールを取り上げた。幸いもう缶ビールはないようで、克也はあきらめたように脱力した。

「・・・好きな人がいたんです」

何の前触れもなく克也は呟いた。玉木は少し驚いて見る。好きな人がいたということではなく、そのことを自分に話す克也に驚いたのだ。

「ガキなりに真剣な恋だった・・・もう、届かないけど・・・」

星空に伸ばした手は何かを掴むことなく虚空を彷徨う。その相手はもうこの世にはいないのだろうかと玉木は考えた。

そんな玉木の心中を察することなく、克也は勝手に語り出した。

それは高校生の話、菅沼克也はそこにいるだけでクラスの人気者になっていた。何もしなくても女の子から告白され、かわいかったらつきあって、かわいくなかったらやんわりと断るといったことを繰り返していた。

気づけば隣には彼女がいる。それが当たり前だった。

だけど、どの恋も本気にはなれなかった。克也は何人もの女の子たちとつきあっていたながら、ずっと昔から好きだった人が他にいたのだ。たぶん初恋だったと思う。

マジで好きだった。すごくかわいいわけでもなかったのだが、その女の子と話していると克也自身も嬉しくて、楽しくて、このま

まずつと傍にいたいと何度も思った。克也にとって、一生分の恋だった。

でも、告白する勇気がなかった。なんていうか、断られたらどうしようという不安と自分から告白したくないというプライドが交錯してできなかったのだ。

「遅いよお・・・」

それが勇気を出して、全てを投げ捨てて告白した返事だった。そのときには、彼女は別の男との結婚が決まっていた。全てが遅かった。

「ガキみたいで笑っちゃいますよね」

どこか自嘲気味に話す克也の話を、玉木有子は黙って聞いていた。「俺が告白したのも、彼女を取られたくなかったからなんです。結婚のことは弟の弘樹から聞いて知ってましたから」

ただ、黙って聞いている。

「でも、俺・・・あのときから恋ができません・・・なんかもう・・・笑えるなあ・・・」

やっぱり沈黙。しかし、さすがに反応がない玉木を不審に思ったのか、克也は身を乗り出して顔を覗き込んできた。

それと同時に玉木の腕が伸びた。克也の胸倉むなぐらを掴み上げ、立ち上がった。

「なんで笑うんや」

「・・・！？玉木先生・・・？」

「先生がその人のことをホンマに好きなら・・・なんで笑うんや？大切な・・・大切な思い出まで否定するみたいに笑ったらアカン！今度そないしたらウチが許さへんから！それから・・・！」

一呼吸置いて、玉木は克也を睨みつける。

「真剣な恋で失恋した人なんて世の中にはぎょーさんおる！ウチか

てそや！自分1人が不幸背負ってるなんて思わんとき！」

そこまで言って乱暴に克也を突き放すと、ふらふらとその場に倒れこんでしまった。慌てて克也が体を支えてくれたのは覚えていますが、それからの記憶は全くなかった。

「玉木先生どうしたんですか・・・？」

今の様子を見ていた生徒は玉木の豹変振りに驚いて尋ねる。対する菅沼克也は特に取り乱すことなく玉木の体を抱えた。

「たぶん酔ったんだろうな。俺も飲んじゃったから今日は家に泊めるわ」

彼女の手から空になった缶ビールを取り上げる。量で言えば克也のほうが飲んだのだが、どうやら玉木は酒に弱い体質のようだ。

妙に頭がさっぱりしている自分に気づく。結構飲んだと思ったが、玉木に怒鳴られて目が覚めたような気がする。

「今日はこのへんでお開きにしようか。あんまり遅いと父ちゃん母ちゃんが心配するだろ」

「えー・・・」

「よっしゃー！片付け開始ー！」

克也の一声で花火などの片付けが始まる。克也も玉木を抱えて家の中へと入っていった。寝ている人間は意外と重い。そんなこと本人には言えないが、細身の玉木でも少し重たく感じるのだ。

玉木を自分の部屋のベッドに寝かせ、自分はその足元に座った。そのとき、ずいぶん前に大阪出身だと彼女が言っていたことを思い出した。

「そうですね・・・」

さっきの玉木が放った言葉の返答だった。

「あれは俺にとって大切な思い出です。あんなふうに自嘲的じゃなくて、心から笑い飛ばせる日が来るといいんだけどなあ・・・」

9 克也の過去（後書き）

後田賢は遊び心です。

前に出てきたケンちゃんと同じ人物だと思います。

っていうか、弘樹はどうしたんでしょうか？

気がついたらこの回登場してませんでした…

10 やまない雨

ここはどこだろう・・・

それが、目を覚ました玉木有子の最初の感想だった。

頭が痛い。なんでこんなに頭がいたいんだろう。昨日何があったんだっけ？とにかく、思い出さなきゃ・・・

学校の当直だった↓終わってから菅沼先生の家へ行く↓先生とビールを飲む↓???

思い出せない。何か話した記憶があるが、内容を綺麗に忘れていた。何か失礼なことをやっていないだろうかと不安になったが、それよりも問題なのが記憶がなくなるほど飲んだという事実だった。

玉木は酔うと説教くさくなるとよく言われるが、どうも古くさい関西弁で相手を怒鳴る傾向があるらしい。

と、そのとき、遠慮がちに部屋のドアが開かれた。

「あ・・・よかった。物音がしたから起きたかなって思ったんです」
克也だった。予想外の展開にあたふたしながら意味もなく服装を整えると、克也は苦笑して部屋に入ってくる。そういえばこの部屋は克也の匂いがする。ひょっとしてベッドを占領したのかもしれない。

「すすすすいません！ベッドを占領してしまつて！」

「いえ。大丈夫ですよ」

明るく笑う克也を見て、玉木は昨日のことが気になってしまった。

「あの・・・昨日、私何かしました・・・？」

「・・・昨日のこと覚えてませんか？」

その質問返しに玉木の中で、ある方程式が妄想によって作り出された。

昨日菅沼先生とビールを飲む↓酔ってふらついた自分を先生が介抱↓朝まで泊まる！

しかし、その方程式は次の克也の一言で崩れることになる。

「先生の関西弁初めて聞きました」

全てを思い出して、玉木は頭を抱えてしまった。

一緒にビールを飲む↓先生の失恋話を聞く↓関西弁で説教する↓
その場で寝る

最低だ・・・！なんてことをしたんだと昨日の自分に問いかける。
今さら後悔しても遅すぎたが。

同じ頃、二日酔いで目が覚めた成瀬弘樹は、心臓が脈打つ度に痛む頭を押さえながらリビングへと下りてきた。

「おはよう」

すでに起きていた姉の亜紀が朝ごはんを用意してくれる。ごはん
と味噌汁、目玉焼き、それと亜紀の作ったサラダだ。

亜紀が帰ってきたのは一昨日のこと。元々お盆前に帰ってくるとは聞いていたが、まさか1人で帰ってくるなんて思わなかった。そこらへんの事情を両親は知っているらしいが、弘樹には聞かされなかった。だから、今でも気になる。旦那はどうしたのかと。

「俺昨日どうやって帰ってきたんだっけ？全然覚えてないや」

「未成年なのにお酒なんて飲むからだよ。なんで飲んだの？」

「ああ・・・いや」

言葉を濁して弘樹は黙り込む。昨日のことを思い出して、痛む頭を押さえる。

雲行きが怪しい。今日は雨が降るかもしれない。

ケータイの着信が鳴ったのはそのときだった。

『よお！俺のビールを勝手に飲んだひーろき君』

電話の相手は克也だった。朝からハイテンションな男にこめかみを押さえたが、決して否定できないのが悔しい。

「朝っぱらからなんだよ。用があるんだったら手短にしるよ」

『じゃあ手短に。お前、昨日唯となんかあった？』

そのストレートな物言いにさすがに弘樹は言葉に詰まってしまった。不自然な間の後、

「いや、別に。唯がなんか言ってた？」

『言ってないけど、見てりやあわかるよ。俺だけじゃなくて坂井もな。あいつ途中で帰っただろ』

「あ・・・」

ここにきて、ようやく真琴の存在を思い出した。昨日は真琴話している最中に唯を見つけて追いかけていったんだ。あの後、すっかり彼女の存在を忘れてしまった。

バーベキューに来たかったと言った真琴の笑顔を思い出して、弘樹は申し訳なく思った。

「ケータイの番号知ってる？話したいことがあるんだけど・・・」

克也との電話を切った後、教えてもらった真琴の番号でケータイをかけてみる。こんなに緊張した電話は生まれて初めてだった。

『なに？』

仕事中だったらどうしようかと思ったが、意外にもあっさりと電話に出てくれた。しかし、相手が弘樹だとわかると明らかに不機嫌になった。

「あのさ・・・昨日はごめん。途中で抜けてっちゃってさ」

『別に気にしてないよ。それじゃあ』

今すぐにも切られそうだったので、慌ててそれを止めた。すぐ怒ってるのかもしれない。

「ごはん食べに行こうって約束したよね！？今度いつ空いてる？」

「……今日しかない」

「じゃあ、今日の午後7時って大丈夫？高校近くの時計塔に集合はどう？」

「……うん」

「じゃあその時間に……」

約束を取り付けられてほっとした……が、

『行かない』

その言葉と同時に電話が切られた。弘樹が次の言葉を発するより前に、電話の機械音が耳に響いた。

菅沼克也が弘樹との電話を終えたとき、玄関で物音がしたことに気づいた。行ってみると、玉木が自分の靴を履こうと悪戦苦闘していた。

「もう帰るんですか！？」

思わず叫んだ言葉がそれだった。克也は自分の言葉に驚きながらも、表情には出さずに玉木の傍へ寄る。

「はい。ご迷惑をおかけしました……！」

自分が酔って説教をしたことを後悔しているのだろう。それがわかって克也は苦笑した。

「昨日のことは気にしないでください。俺だって愚痴っちゃったんだし。いろいろとすっきりしました」

そこまで言って昨日の玉木を思い出す。それが顔に出たのか、玉木が苦い顔で俯いてしまった。

「今でも好きなんですか？」

呟かれた玉木の声はとても小さかったが、克也にはちゃんと聞き

取れた。

だから、答えることができなかった。本人でさえわからなかったから……

午後になるといよいよ空が暗くなり、もうすぐ雨が降り出しそうだった。

真琴には行かないと言われてしまったが、弘樹は行くことを選んだ。いや、行きたかったんだ。

「出かけるの？ 雨降りそうだよ」

「大丈夫。帰りはちよつと遅くなるかも」

亜紀に一言伝えてから弘樹は家を飛び出す。駅に向かう途中、傘を持ってこなかった自分を後悔したが、今さら戻る気にもならなかった。

雨が降り出したのは6時過ぎだった。その頃にはすでに時計塔の前に到着していた。

雨宿りすることなく待ち続けた。

だけど、時間になっても真琴は来なかった。

雨は時間を追うごとに強くなっていった。聞こえる音は雨しかない。

時刻は10時をまわっている。

その頃には弘樹は小さくうずくまって小さくなっていた。
ザアアア……

雨音のノイズ。

「ヒロ君？」

ノイズに混じったその声は弘樹にとって聞き覚えがあった。ゆっくりとした動作で顔を上げると、いるはずのない人物がそこに立っ

ていた。

「・・・唯？」

坂井真琴が仕事を終えたのは、午後9時過ぎだった。雨が降ったせいで撮影が遅くなってしまい、マネージャーに頼んで慌てて車を走らせてもらう。

雨がひどくなっている。もう待っていないかもしれないが、それでも待ち合わせ場所へ向かうことを選んだ。

しかし、弘樹のケータイにかけてみたが、弘樹は出なかった。

「でも真琴がデートなんてね」。スキヤンダルには気をつけてよ」その境遇を面白がるようにマネージャーがひやかしてくる。

「そんなんじゃないです・・・あつ！ここでいいです」

時計塔が近くなってきた。後部座席に置いてあった傘を掴んで飛び出していく。人影が見えたから自然とスピードも速くなる。

だけど、そのスピードはだんだん遅くなってついに停まってしまった。

動くことができなかった。

弘樹が知らない女の人・・・たぶんこないだのバーベキューのときにいた人に抱きしめられているのを見てから・・・

10 やまない雨（後書き）

まわりくどい展開ですね……

11 彼らの想い

それはバーベキューの日。菅沼唯の家の庭で行われたそれは、兄の克也のクラスメートと行われた。元々知らない人ばかりだったため唯自身も参加する気はなかったのだが、克也から弘樹が来るかもしれないと言われて少しだけ参加してみることにした。

だけど、いざ見つけてみると、野球帽に眼鏡をかけた女の人と仲良さげに話しているのを見つけてしまった。

なんだか信じられなくて、唯はその光景を凝視してしまう。そして、目が合ったとき、思わずそらしてしまった。

「唯！」

とっさに逃げたが、玄関前まで来たところであきらめた。自分の後を弘樹が追いかけてきたことを知っていたので、そのまま振り返る。

「久しぶり」

弘樹の笑顔がなんだか幸せそうで腹が立つのと同時に、心が何かに締め付けられるような気がした。

「……ヒ口君、私に自分は子供じゃないって言ったけどほんとだったんだね。もう彼女できちゃったみたいだし」

口から出たのは意味もわからない憎まれ口だった。なんだってこんなやつ当たりのようなことを言ってしまうのだろうかと疑問に思ったが、もう唯の口は止まらなかった。

「だいたい私のことだって本気じゃなかったんじゃない？」

「何言ってるんだよ。もしかしてやきもち？」

その弘樹の言葉にかっとなって叫んでしまった。

「そんなんじゃないよ！ヒ口君のことなんか好きじゃないよ！」

気づいたときにはもう遅かった。思ってもないことを口にしてしまった。

「こないだのこと怒ってる・・・？」

遠慮がちに呟く唯。成瀬弘樹はしばらくの間の後、ふるふると首を振った。

昨日は全身ずぶ濡れになってしまったのと、さすがに体調が悪く
なってしまったので、結局駅のホテルに泊まることにしたのだが・
・驚いたことに唯も泊まると言い出したのだ。

支出を少なくするためにお互いに相部屋にしたが、バーベキュー
でのことがひつかかってあまり会話することはなかった。

「唯・・・昨日なんであそこにいたの？」

「最近大学近くでバイト始めたの・・・ヒロ君こそなんでいたの？」
その質問に弘樹は真琴のことを思い出してしまった。結局昨日は
来てくれなかった。本当は来ていたのだが、そのことに弘樹は気づ
かなかったのだが。

「待ち合わせ。人を待ってたんだ」

正直に答えると、唯が悲しそうな顔をした。

こういうことは苦手によくわからない。自分をふった唯があのと
き怒ったことも、今だって悲しい顔をした理由がわからない。

「あの女の人・・・を？」

「あのさ、正直に言っていていいからさ、言いたいことがあるんなら
はつきり言つてよ」

怒っていないと言いながらも、少しつつけんな言ひ方になる。
弘樹はケータイを開き、いくつか真琴から着信があることを発見し
たとき、あることに気づいた。

自分の左手が唯によって握られていることに。

「・・・唯？」

同じ頃、県内の公園で雑誌の撮影が行われていた。観衆が多い中、その中心にいる人物は雨上がりの交差点でいきいきと動いている。

「いいよー！もうちょっと右・・・ああオツケー！・・・はい！おつかれー！！」

「真琴、おつかれさま」

坂井真琴のマネージャー、藤村真由は紙コップに入れた冷たいお茶を渡した。真琴はお礼を言ってそれを飲む。

昨日の真琴はひどいものだった。知り合いと待ち合わせているかと急いで待ち合わせ場所まで行き、強い雨の中を飛び出していった。そこまでは良かったものの、なぜか彼女は意気消沈して車まで戻ってきた。

理由は聞けなかった。だって彼女はずっと後部座席でうずくまっていたからだ。たぶん・・・声を殺して泣いていたんだと思う。

そんなことを考えているうちに、休憩時間が終わってしまった。

立ち上がるうとする真琴を藤村は制する。

「もう大丈夫なの？もうちょっと休憩もらってこようか？」

「平気です。それよりお願いがあるんだけど、これからもっとがんばりたいから、もっともつと仕事増やしてほしいの」

「・・・でも！」

「お願い！約束、してください・・・」

懇願するような真琴の瞳に、藤村は何も言えなかった。

この後、坂井真琴は飛躍的に仕事を増やし、国民的に知られていくことになる。

午後１時、昨日と違って雲１つなく青空が広がる。

菅沼克也は１つ１つ神社の石段を上がりながら空を見上げた。この景色をどのくらい見ていないだろう。

「かつちゃん」

呼ばれたその声に気づいて、空を仰ぐ顔を下げた。見ると、長い髪を後ろで1つに束ねた亜紀の姿があった。彼女の笑顔に自然と克也も笑顔になって石段を駆け上った。

「ごめん。待たせた」

「うっん、大丈夫。それよりこうして久しぶりに会えて嬉しかった」
2人してすでに乾いている石段の1番上に座る。ここは昔、2人でよく遊びに来た所だった。今日は久しぶりに克也のほうから亜紀を呼び出したのだ。

「なんか本当に久しぶりだね。こんなふうに2人で話すの」

「だな。亜紀が結婚する前だから・・・8年ぶりか？」

「8年かぁ・・・おばさんになるわけだ」

亜紀はいくつになっても変わらない。そういう自然なところに克也は惹かれたんだ。もし以前の自分だったら、きつとまたずるずると望みのない恋をしていくことになるだろう。だけど、今なら大丈夫なような気がした。

「俺、亜紀を好きになってよかった。今じゃいい思い出だよ」

「・・・え・・・」

克也は自然と微笑む。

「ふられたときはなかなかあきらめられなかったけど、それじゃあ駄目だつて気づいたんだ。好きならなおさら悪い思い出にはしたくない。俺も前を向く」

「・・・」

「亜紀とはやっぱりずっと友達でいたいからさ、久しぶりに帰ったときぐらいメールしろよ？そしたら昔話でもしようや」

しばらく間があった。しかし、確かに亜紀は頷いた。8年前にずれた溝がようやく埋まったんじゃないかと克也はほっとしていた。

ただ、亜紀はそのとき別のことを考えていたなんて、そのときの克也には想像できなかった。

「そついえば、弘樹どうしてる？」

「あ・・・昨日は友達んちに泊まってくつて電話があつて帰つてこな

「かつたけど」

「へえ……」

たぶん友達とは坂井真琴のことだろう。もしかしてあの後何かあったのかと想像しかけたが、それと同時に昨日唯からも友達の家泊まっていくと連絡があつたことを思い出した。

考えすぎか……嫌な予感が頭をよぎったところで、克也はそれ以上考えることをやめた。

だけど、克也の考えはあながち間違っていなかった。

唯に左手を握られて、それから顔が近づいてきたところで、思わず成瀬弘樹は驚いてその手を振りほどいてしまった。その拍子にバランスを崩した唯が後ろへのけぞって、置いてあつたテレビにぶつかってしまった。

「あっ……!」

派手な音がして唯が倒れこむ。慌てて弘樹は駆け寄って唯の体を起こす。

「ごめん!大丈夫か!？」

「……うん。平気……」

平気と言いながらも左肩を必死に押さえている唯。申し訳ないと思つたが、服をそつとずらして彼女の左肩を見してみる。白い肌に不自然に変色した大きな痕がある。内出血したようだ。

「タオル濡らしてくる!それで冷やせば……」

「ま、待つて!」

ぐいつと腕を引っ張られて弘樹はその場に引き戻される。驚いて振り返ると、痛みのせいなのか、それとも別の理由からか、唯が泣きそうな顔で弘樹を見つめてきた。

「……どこにも行かないで……お願い」

弘樹は何も言えずにその場にたたずむしかなかった。

11 彼らの想い（後書き）

今回はいろいろな人視点で書かせていただきました。
なんだかどろどろしてきて作者としても

複雑な心境です。

そろそろこの暗さから引っ張り出したいんですが
どうなるんだろー……

12 弘樹と真琴

月日は流れていく。

12月23日、冬休みの今日、成瀬弘樹は寒空の下で1人買い物をしていた。いや、正確にはある人物と待ち合わせているのだが、約束の時間までまだ余裕があるため、近くをぶらぶらすることにしたのだ。

だけど、少し歩いて後悔した。弘樹の目の前にはビルに映る大型テレビがあり、そのCMに坂井真琴の姿があつたのだ。最近ではCMやドラマ、雑誌を開けばモデル、ファッションショーなどその活動を大きく広げている。弘樹と会わなかったあのときから……

「弘樹！」

自分の名を呼ぶ声に気づく。振り返ると、やたらハイテンションで駆け寄ってくる克也がいた。

「待ち合わせは改札前だろ？なんでこんな所にいんだよ」

「まだ時間あるだろ。それまでぶらついてようと思ったんだよ」

特に謝ることなく弘樹は言い放つ。それに対して、克也はあからさまにけつという顔をした。

「まあいいや。今日はつきあえよ。俺が奢^{おご}るから」

「受験生連れまわす担任なんて聞いたことねーよ」

「ただ昼飯一緒に食おうって言っただけだろ。すぐ終わるから」

確かにそう言われて誘われたが、昔から克也のほうから遊びに誘ってくるのは何か裏があるからだと決まっている。たぶん何か言われるんだろうなと覚悟はしていた。

「うめーな、これ。あつうなぎだ！」

105円の回転寿司。克也が連れてきたのはそこだった。

隣でががつと食べ続ける克也を見ながら、弘樹は細々とマグロ

を食べる。さつきからこの調子だったが、短気な弘樹はとうとう我慢できなくなった。

「いい加減言えよ。学校じゃ言えないことがあるんだろ」

「ある．．けど、まだ言わない。これ食べ終わってからな」

そう言つてうなぎにかぶりつく。なんだか悔しくなったので、弘樹は目の前を回っていた中トロを手取る。

「あつ！お前、それ高いやつだろ！俺でさえまだ食べてねえのに．．」

「自分のお金じゃないからねえ．．克也が言いたいこと早く言つてくんなきやもつと食べ続けるかもな」

「わかった言つよ。坂井が倒れた」

あまりにもあつさりと言い放たれた言葉に弘樹はとっさに何も言うことができなかった。克也は特に取り乱すことなく寿司を食べ続ける。

「．．．うそだろ。だってあんなにテレビとか出てるじゃんか．．．」

「まー倒れたつて言つても風邪らしいけどな。ここんとこ休みなしだったからマネージャーが大事とつて2日間休みにしたんだとさ」

弘樹は自分の心臓が急に不安になるのを感じた。

「お前さ．．．唯のこと好きなのか？」

今まで食べながら喋っていた克也がようやく弘樹のほうを向いた。その人の真意を探るようなまっすぐな瞳に弘樹は気まづくなってしまう。

あれから唯とはつきあつてはいないが、時々会つて遊びに行くようになった。

「．．．．．好きだよ」

「．．．．．じゃあお前．．．．．なんでＹ大学受けんだよ」

唯が好きなら唯と同じ大学を受ければいいのに、そっちのほうが確実に合格を狙えるのに、なんであえて難関大と言われる大学を．．．真琴と同じ大学を受けるのかと克也は聞いているのだ。

「目標は高いほうがいいだろ」

自分でもわからなかった、いや、わからないようにしていた。

「まあいいや。俺の用件はここへ行けてことだ。今日中に」

差し出された1枚の白い紙には、どこかへ行くための交通手段が書かれてあった。

地下鉄を乗り継ぐこと30分、ようやくとある駅にたどり着いたとき、駅前で弘樹のことを待っている女の人がいた。年齢は30歳くらい、それでも若々しい印象を受ける。

「はじめまして。坂井真琴の専属マネージャーをしております藤村と申します」

予想はできていたので、あえて驚くことはなかった。

「あなたが克也に連絡したんですか？」

「はい。わざわざ来てくださってありがとうございます」

聞きたいことはそんなことじゃない。だけど、言葉が出てこない。藤村に案内された所はとても高さのあるマンションだった。最上階を見上げるだけで首が痛くなってしまいうような高さで正直驚いた。その12階、真琴の部屋があった。

「ちなみに・・・真琴には成瀬さんが来ること言ってませんから」
さらにとそんなことを言われたとき、弘樹の中に恐ろしい考えが浮かんできた。そういえば、ケンカ別れしたようなものだ。もし会いに行ったら、真琴に永遠に無視される気がするのだ。考えたら恐ろしくなった。

そんなことを考えているうちにその部屋まで来てしまった。

藤村に開けてもらって部屋の中に入ったが、なんだか不法侵入している気分になった。藤村は中に入らないらしく、ますます弘樹の不安は高まった。

誰もいない。気配すらない。本当にこの中に真琴がいるのかどうかさえ疑わしくなってきた。

「・・・藤村さん？」

部屋の奥から聞こえてきたその声に弘樹はびくつとなってしまうた。

やっべえ・・・隠れなきゃ！

だけど、すでに遅かった。おそらくマネージャーが帰ってきたのに何の声もないことを不審に思っ見て来たのだろう。坂井真琴と目が合ってしまった。左右の異なる色の瞳が大きく見開いた。

弘樹も固まる。真琴も動かない。お互いに何も言えなかった。

「マネージャーさんに開けてもらった。話があるんだけど・・・体調は大丈夫？」

最初に言葉を発したのは弘樹だったが、それは緊張感でいっぱいだった。だが、真琴が小さく頷くのを見てほっとした。

それと同時に自分が久々に嬉しさを感じていることに気づいた。

弘樹を送り出した後、菅沼克也はとりあえず自分の役割を果たしたと考えていた。

真琴のマネージャーである藤村から連絡があったのは朝の7時頃。きつと弘樹に会いたはずだと泣きつかれ、その後強引に弘樹をご飯に誘って真琴のことを話した。

正直、こういう厄介ごとに首を突っ込むのはごめんだったが、今の弘樹がなんだか昔の自分のように迷いながら立ち止まっていて、克也はほっとけなくなったのだ。唯には悪いが、誰かがちよつとした道しるべを作ってあげなければならぬ気がした。それが克也自身だった。

克也もその道しるべで、迷っていた自分から抜け出すことができた。

明日はクリスマスイブ。初めて好きな人と過ごせる日になりそう
だ。

「弘樹もがんばれよ」

自然と呟かれた言葉は、今日だから言える言葉だった。

ブルルルルル・・・

23日の午後9時。玉木有子の自宅の電話が鳴り響いた。ちょうど、明日のための服を選んでいた玉木は番号を確認してから電話に出る。

「もしもし？こんな時間にどうしたの、お母さん」

『有子？アンタ明日こっちに帰ってきて。お父さんが倒れちゃったのよ』

「えっ！？うそ・・・！！」

母は困ったような口調で言い放つが意外に冷静だった。それよりも慌てたのが玉木のほうで、おろおろと顔を振る。

「それで！？どうなの？具合は！」

『それがねえ・・・意識はあるんだけど、なんとも言えないらしいの。だから明日でいいから来なさい？お父さんが有子に会いたがってるのよ』

「あ・・・明日・・・」

24日は先約があった。だけど・・・父が会いたがっていると聞いて胸が苦しくなってしまった。いつも体力だけが自慢だった父が・・・

ちらりと時計を見る。明日の待ち合わせは午後5時。今から帰ればまだ間に合うかもしれない。

「わかった。今から行くね」

電話を切る。しばらく複雑な気持ちになってしまった。だが、しばらくして時間を惜しむようにコートを着る。

お父さん、今から行くからね！菅沼先生・・・待ち合わせまでに
は絶対行きますから・・・！

12 弘樹と真琴（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。

この小説はほとんど毎日更新することができたんですが、
こっちの都合でしばらく更新できなくなります。

次回更新予定は29日です…

って言うっておきながら更新するかもしれませんし、
29日を過ぎる可能性もあるんで、

あくまでも予定としてとってください…

13 お見合い

9時半に出る新大阪行きの新幹線に乗り、地元大阪に着いたときには11時を越えていた。そこからタクシーで実家まで帰った。

「ただいま・・・」

電気が消えていたからみんな寝ているのかもしれない。あるいは父の入院している病院にいる可能性もある。

伝統的な日本家屋。1人でいるとこんなに広くて心細い所はない。玉木有子は急激に不安になってしまった。

しかし、その不安は電気が点いたことで一瞬なくなることになる。

「あ、お姉ちゃんだ。ほんとに来た」

点けたのは玉木の妹の玉木直子だった。全身ジャージ姿でいまどきの若者らしく茶髪に巻き髪 of 彼女は近づいてくることなく無表情で立っている。

「直子、お父さんは大丈夫なの？」

「うーん・・・まあ明日になればわかるよ」

直子にしては妙にはぐらかすその態度が気になったが、明日病院に行くのかと思い、その日は自分の使っていた部屋で寝ることにした。

しかし、翌朝、直子と一緒に病院へ行ってみて、真実を知った。

「よっ！有子、元気にしottaか？」

ぎっくり腰で入院した父は予想以上に元気で、もつと最悪なことまで考えていた玉木にとって拍子抜けするほどだった。

「なんだあ・・・驚かさないでよ。でも、それくらいで安心した」

「ちやうちやう。俺はこうなって逆に安心できなくなった。せやからこうして来てもらたんや」

玉木が母を見ると、いけしゃあしゃあと編み物をしている。傍で

は直子が無関心そうに外を眺めている。なんだか気になってしまった。

「俺ももう年や・・・いつ死んでもおかしくないと思っとなる・・・
・有子、お見合いしようや」

「はっ!？」

「いいじゃない、有子。どうせクリスマスも暇してたんでしょ？」

母が和やかに言い放つ。まるでドラマでも見ているかのような展開に呆然とすると同時に、玉木は少し前の出来事を思い出していた。

「おつかれさまです」

玉木が遅くまで仕事をしていると、印刷室から戻ってきた克也が声をかけてくれた。たったそれだけのことで嬉しくて、玉木は心臓をばくばくさせながら克也におつかれさまと言いつ返す。

季節は12月の冬。職員室は暖房が入っていたが、それでも寒いものは寒かった。

ふと、そのとき、あることに気づいた。今、この職員室には克也と2人きり・・・

「玉木先生」

その克也の言葉に一瞬自分の心の中を読まれたんじゃないかと思つて玉木は驚いてしまった。

「なっなんでしょう・・・か!」

克也はきまり悪そうな顔をして玉木の傍にやって来る。何かを言おうとしているが、とても言いにくいことのようなだ。

「菅沼先生・・・?」

「・・・もし、よかつたらいいんですけど・・・24日・・・暇だったら、一緒に食事でもしませんか?」

耳を疑った。克也が照れ隠して視線をそらしているのが嘘のようだった。

玉木は顔が真っ赤になつていくのを感じた。

「も……もちろんです！すごく楽しみです！！」

「ほんと……！？やった！」

子供のように微笑む克也を見て、これが現実なんだと悟った。まるで夢のようで夢なら覚めないでと思ったが、翌朝起きてみて現実だとわかった。

夢じゃない……菅沼先生に食事に誘われたんだ………！

「お見合いって言ってもそんな堅苦しいものじゃないから。ちょっとお食事をするだけよ」

ある意味でダークホース的な存在の母はにつこりと微笑んで言う。元々東京出身の母は、家族内で唯一素が出てても関西弁で喋らない。その影響からか、玉木有子も妹の直子も普段は関西弁を使うことがないが、何かの拍子にぼろっと出ることがある。

「お姉ちゃん、彼氏とかいないの？」

直子が不思議そうに尋ねてくる。

「いいいいないよ！そんなの……」

「だめだなあ……だからお見合いなんてさせられるんだよ。私みたいにとりあえずかつこいいのキープしときなよー」

直子の言葉に玉木は苦笑するが、クリスマススイブに食事に行く約束をした相手はいる。このことを克也に言うべきかどうか迷ったが、もし言ったら『じゃあ食事はなしにしましょう』なんて言われそうで怖かった。

とにかく、適当に食事して帰ろう……

そう決意した玉木の目の前に突然ある人が現れた。見覚えのある顔。忘れられない人物。

「黒沢君？」

玉木にとって初恋の人の名前を口にすると、彼は昔と同じ面影を

残す顔でにつこりと微笑んだ。

小学6年生の頃、同じクラスの隣の席の男の子。それが、黒沢高^た志^かだった。学級委員長でクラスの人望も厚く、誰からも好かれていたのを覚えている。そんな彼に密かに玉木は恋心を抱いていたのだが、隣の席になって話すようになったときから「玉木有子は黒沢のことが好きなんだ」と冷やかされてしまい、上手く話せなくなってしまったのだ。

その人が今成長して目の前にいる・・・

「玉木のお父さんからこの話を聞いたとき正直驚いたけど、すごく嬉しかった。また会えるんだって」

お見合い相手は黒沢だったらいい。ちなみに、お見合いと言っても本当に堅苦しいものではなく、ただ近所にあつた和食のレストランへ食べに行くだけだった。

「玉木は今何してるの？」

「あ・・・高校の教師をしてるんです。黒沢君は・・・？」

「俺は普通の銀行員だよ。最初は全然ついてけなかったけど、今じやもう新人に教える立場だよ」

こうして会話していると、あの頃が蘇ってくる。懐かしい思い出。

玉木は今の自分の状況を忘れて楽しんでしまった。

「でも、教師なんてすごいな。きつとすごい努力したんだね」

「教師は幼い頃からの夢だったので・・・」

玉木は照れくさそうに答える。

「そつえば小学生のときに言ってたね。教師になるために高校も市内の難関校目指すって。俺もそれ聞いて一緒に高校入ろうって頑張ったんだけど」

「え・・・？」

「玉木・・・あのときの噂って本当なの？」

真剣な眼差しで見つめられ、思わずどきっとしてしまふ。

「俺のことが好きだつて」

この後、玉木は頭8割で昔の思い出を楽しみながら、残りの2割で克也のことを考えていた。遅れるかもしれないと克也のケータイの留守電に入れておいたが、それに対する返事はまだなかった。

午後5時前、待ち合わせ場所に少し早く来た菅沼克也はイルミネーションが綺麗な駅前に来ていた。

目の前には青白く光とても大きなツリー。これはテレビでも放映された有名なイルミネーションだった。

ふと、克也はツリーを見る2人の男女の姿を見つけた。弘樹と真琴だ。

「弘樹のヤツ、上手くやったんだ」

そのことにほっとして克也は空を仰ぐ。

ただ、玉木と一緒にこのイルミネーションを見たくて。ただ、玉木と一緒にいたくて。

それだけを考えていたので克也は気づいていなかった。留守電に入った玉木からのメッセージには……………

13 お見合い（後書き）

更新が遅くなってしまいました…すいません！

今回は玉木の話でしたね。今まで克也一筋だった彼女は
今後どうなっていくんでしょうか……

14 表裏一体のクリスマス

時は少し遡る。さかのぼ

成瀬弘樹がマネージャーの藤村に連れられて訪れたマンションには、体調不良で休んでいる坂井真琴の姿があった。

いろいろあつてこういうとき最初に言うのはきつとりとめのない平和的な内容だと思うのだが、不器用な弘樹にはそんな芸当はできなかった。

「俺まわりくどいこと苦手だし、しつこいって思われるのも嫌だから、引くときは潔くいっしょに引きたいんだ」

真琴は黙っている。それでも弘樹は真琴をまっすぐと見つめる。

「俺がウザイってはっきり言つて。そうしたらちゃんとあきらめるから。つていうか、あきらめたいんだ・・・」

妙なところで白黒はつきりとさせたがり、大事なところではつきりしない男だと自分でもわかってしている。でも、どうしようもなかった。

しばらくの沈黙の後、真琴はようやく口を開いた。

「ウザイ・・・」

真琴の意思表示。それを確認したような気がして、ちくちくするような痛みを覚えると同時に、すぐにこの場から逃げ出してしまいたくなった。潔さの欠片もなく、男としての余裕もなく、弘樹は立ち上がった。

と、そのときだ。後頭部に何かやわらかい物が当たった。それが枕だと気づいたとき、振り返ると真琴が傍まで来ていた。

「あんたがわかんないよ・・・あのときだつて・・・そりゃあ撮影で遅くなつたのは謝るけど、他の女の人と一緒にいたじゃん！今だつて・・・あきらめたいとか・・・わけわかんないよ・・・！だつたら、はじめから期待持たせるようなこと言わないでよー！」

真琴の剣幕に弘樹はお圧される。

「わ・・・わっかんねーよ！あるとき来ないつつたのはそっちだろ！？」

「ごはんを食べに行く約束をしていたときのことを怒っていることはわかったので、なんとか反抗してみる。

「でも待つてるかもしれないから一応行くのが普通でしょ！？なのに・・・なんで知らない女と抱き合ってるのよ！！」

「あれは克也の妹だつて！たまたま会っただけ！大体・・・」
「そこまで言いかけてやめた。こんなことを言いに来たんじゃない。ウザイと言われたのに潔く帰れないんだ。

「わかってた・・・きっかけは不純かもしれないが、自分の本当の気持ちに。」

「元気そうなのでとりあえず帰る。お邪魔しました」

「本当にお邪魔でした」

時間にして約2時間くらいだろうか。お互いに文句しか言わずに玄関まで行く。弘樹が靴を履こうとしていると、後ろから真琴がやって来て、黙って赤いマフラーを巻いてくる。

「ここに来たせいで風邪がうつったなんて言われたくないし」

「ぶっきらばうに真琴は話す。」

「うつせばいいよ。あさってからもう仕事なんだろう？」

「そうだね。少年にうつせばいいよね」

「ごほんごほんわざわざらしい咳を繰り返して、真琴はわざと菌をぶちまける。そんな彼女の様子を弘樹は黙って見ていたが、人気モデルの作り出すその光景がおもしろくて、思わず苦笑してしまった。

そのとき、真琴の笑顔が見えたら、弘樹の体は自然と動いて・・・真琴に軽くキスをしていた。

「・・・・・・・・っ」

1度唇を離してから至近距離で真琴の表情を見る。彼女は恥ずかしそうに目を拳動不審に動かしていたが、やがてぎゅっと目を閉じ

てあごを少し上に上げた。その頬を赤くして、緊張している様子がかわかった。

弘樹は真琴の風邪を全部もらうつもりでもう1度キスをした。

「風邪、本当にうつっちゃうかもよ」

「いいって。人にうつせば治るって言うだろ？・・・それより、マフラー明日返すから」

「わかった。明日待ってるね」

それだけ言って弘樹はマンションを出て行く。

明日はクリスマスイブ。弘樹にとって特別な日になりそうだった。

そして、クリスマスイブの夜10時頃、弘樹と真琴が2人でイルミネーションを見て楽しんでいる傍ら、^{かたわ}玉木有子は大急ぎで克也と約束していた待ち合わせ場所まで向かう。

あの後、結局行けないと電話をしようとしたのだが、肝心なときにケータイの電源が切れてしまい、克也と連絡が取れなくなってしまった。

もう待っているわけがない。約束の時間に5時間以上も遅れているのだ。それでも行かないわけにはいかなかった。

「ただ・・・ただ・・・」

克也はそこにはいなかった。もちろんそれはわかっていたことが・・・

なんてことをしたんだろう。せっかく食事に誘ってくれたのに、何も言わずにドタキャンしてしまった。

「最低だ・・・私」

ここまでの新幹線が雪の影響で停まったため、こんなに遅くなってしまったのだ。

それよりも、自分のせいで。

「玉木先生？」

振り返ると、駅の広場の片隅でコートのポケットに手をつこんだ菅沼克也がそこに立っていた。

「よかった。なんかあったんじゃないかって心配したんですよ・・・」

「

困ったように笑う克也に、玉木はお見合いのことが言えずに、実家の父が倒れたがケータイの電池が切れて連絡できなかったと言いつつ訳をした。

「だけど、心がずきずきと痛んでしまった。この寒空の下、克也はずっと待っていてくれたのだ。」

「本当にごめんなさい・・・」

「気にしないでいいですよ。それよりも、お父さんがたいしたことなくてよかったじゃないですか。俺は・・・俺の望みは叶ったんで満足してます」

克也の優しい言葉に余計に罪悪感が生まれてしまった。どうしようもなく自分が嫌になる。

「このクリスマスツリーを見ることが俺の望みだったんです」

目の前に広がるのは、大きくて青白く光る綺麗なクリスマスツリー。それがにじんで見えたのはなぜだろう。

しかし、玉木の心の中に生まれた罪悪感はこの後さらに大きくなっていく。

翌朝、25日はクリスマスだったが、通常通り補講が行われた。

結局昨夜はお互いにツリーと一緒に見ただけで終わった。せつかく予約してくれた食事に行くこともなかった。

玉木が職員室に着くと、斜め向かいの席に座っている克也を見て

みる。いつもこうやって見るのだが、たいてい目が合うことはなく、今日も案の定気づかれなかった。それが余計に苦しかった。

「玉木先生、おはようございます」

席が離れている養護教諭の尾崎がにつこりとした笑顔で挨拶をしてきた。今までわざわざそんなことをしてこなかったので、少し面食らいながらも玉木は挨拶を返す。

「ねえ、昨日大阪にいませんでした？」

「は・・はい。どうして知ってるんですか？」

純粹に気になって尋ねる。

「私も旅行で大阪に行ったら、玉木先生が男の人と歩いてるのを見てびっくり！もしかして、デートでした？」

「まっまさか！昔の同級生ですよ！」

その慌てように何かを察したのか、尾崎はからかうように笑って「わかった。初恋の相手なんですよ」

とつさに何を言うべきかわからなくなり玉木が口ごもると、それを肯定ととったのか周囲の先生もにやにやと笑って冷やかしの視線を向けてくる。

ただ1人、菅沼克也を除いては。彼だけは言いようのない表情でただ玉木を見ていた。

「まただめかあ・・・・・」

本来学校内では喫煙室以外では煙草を吸ってはいけないのだが、なんとか気分を晴らすために菅沼克也は科学実験室で一服した。

煙草でも吸わないとやっていけない。

弘樹の姉、亜紀のときもそうだった。肝心なことを言うときは、いつだって遅すぎたのだ。

さっき、昨日の玉木のことを知って、正直こたえた。亜紀の結婚を知ったときと同じくらいに。

「ケムい」

近くでセンター試験の過去問を解いている弘樹が睨んでくる。

「なあ弘樹ー・・・」

「なに？」

「俺・・・本当に好きな人とは絶対幸せになれないかも」

弘樹に言っただけではなく、克也自身の境遇に呟いた。

14 表裏一体のクリスマス（後書き）

こんな小説ですが読んでくださってありがとうございます。

なんだかずるずると地底をはいつくばった内容ですが、次第に明るくなっていくと思います。

次回の更新予定は9月2日です。

15 いっはぎっ？（前書き）

今回はいつもよりは短めです。

あんまり進展しなくてすいません…

15 いっはどい？

弘樹の姉、亜紀が結婚するという事実を菅沼克也が知ったのは、高校3年生のときだった。

当時、亜紀は19歳で大学2年生。バイト先で知り合った25歳の男性と結婚することになった。

「ウソだろ！？結婚なんて・・・！！」

まくしたてるような剣幕で亜紀に詰め寄っても、彼女は苦しそうな表情で俯いているだけだった。

「なんでだよ・・・まだ早すぎるだろ・・・」

「今結婚しないと、修一さん^{ひさし}とずっと会えなくなっちゃうの。だから・・・もう、決めたことだから」

「だからって・・・」

思わずぐいつと亜紀の腕を掴むと、彼女が痛そうに顔を歪めたのがわかった。

「あっ・・・ごめっ・・・」

「もうほつといてよ！かつちゃんには関係ないでしょ！！」

「関係なくない！！お前が好きなんだよ！！！」

かっとなって言ってしまった言葉。長い間ずっと心に秘めていて言えなかった言葉。今さら遅すぎた言葉。

「遅いよ・・・」

両手で顔を覆って泣き出す亜紀。克也はいたたまれなくなつてその場から2、3歩後ずさった。

「ごめん・・・もう言わないから。明日からはちゃんといつもどおりの幼なじみとして接するから。だから・・・もう泣くなよ・・・頼むからさ」

泣きたいのは克也のほうだ。

見たくない・・・俺はただ・・・亜紀の笑顔が好きだったただけだ。こんなふうに泣かせたかったわけじゃない。

「じゃあな。結婚式には呼べよな・・・」

それが精一杯のかっこつけた言葉だった。そう言って去るしかなかった。

「・・・かつちゃんはそれでいいの？」

亜紀の言葉に答えることができなかった。

「・・・ちゃん・・・お兄ちゃん！」

誰かの声にはつとしたとき、克也は自分が家にいることに気づいた。顔を上げると、自分のベッドの前に仁王立ちしている唯の姿があった。

「なんだ・・・唯か」

「なんだとはないでしょ。お客さんだよ」

「お客さん・・・？」

12月31日の午前、特にすることもなく部屋でぼーっとしていたが、唯に言われて渋々玄関まで出て行く。しかし、そこには誰もいなかった。

「誰もいないじゃん」

家の中に入って唯に文句を言うと、彼女は心底不思議そうな表情で顔を傾ける。

「え？だって来たよ？ロングヘアの細身の女の人」

「えっ・・・？」

たったそれだけの情報である人物を頭に浮かべた。急いで玄関に戻ってみてもやっぱり誰もいなかったが、郵便受けに克也宛の黄色い封筒が入っていることがわかった。

克也は焦る気持ちを抑えて封筒を開ける。

「どこ行くの!？」

財布とコートを取りに来て、そのまま出かけようとする克也を唯が驚いて尋ねる。

「大阪！」

答えながらコートを羽織る。後先なんて考えずに。もうあのときのような想いをしないために。

同じ頃、地元大阪の実家で、玉木有子は母と妹の直子と一緒に題して家族会議というものを行っていた。

「つまり・・・まとめると、有子には好きな人がいて、それは黒沢君じゃないのね」

「そう・・・なの。だから、このお見合いはどうしても受けられない」
はつきりと自分の意思を伝えると、意外にも母はすんなりとそれを理解したようで、

「そうねえ・・・さすがに勝手にお見合いなんてひどすぎるとは思っていたのよ」

「っていうか、お姉ちゃんの好きな人ってどんな人？」

興味津々な様子で尋ねる直子。

「どんなって・・・漁師さんみたいにかっこよくて、七福神さんみたいに優しくて、自由の女神みたいに笑う人・・・かな？」
「はっ!？」

照れくさそうに話す玉木の一方で、そのときの直子の想像した人物像は恐ろしいものになっていた。しかし、母はにっこりと笑いながら、

「すごくいい人そうね」

「でしょ？」

「どこが!？おかしいでしょ!」

「わかった。お父さんには私から言うておく。でも・・・黒沢さんは・・・」

ようやく話の核心になって、玉木は黙り込む。それはずっと考えていたことだ。母の話を聞くと、玉木の父と黒沢の父が話している最中にそんな話になったらしい。いくら本人が知らなかったとはいえ、迷惑をかけたことに変わりはない。

「それは・・・私が言う」

克也が自分を好きにならないことはわかっていて。だけど、それでもケジメをつけたかった。

そして、そのケジメをつけるために取った行動が、酒を飲むことだった。もちろん、酒に弱い玉木がそれを行うことによって得た結果が良いものだとは限らない。

そんな状態で、玉木は黒沢と会った。

「ごめん。大丈夫だから、行こうか」

「あ・・・うん」

中途半端に酔ったようだ。玉木は関西弁が出ない代わりに思考能力が低下していた。足元がくらくらする中、なんとか歩くことに集中する。

「玉木、大丈夫？ちよつとどつかで休もうか？」

「平気です・・・ちよつと休めば・・・」

大丈夫と言いつつ、休みたいという玉木の意見を理解し、休む所を探した。そして、彼が見つけた所は・・・

「2名様のご宿泊でよろしかったですか？」

「はい。おねがいします」

眠たくてここがどこかわからない。微妙な意識のまま玉木は周囲を見渡す。どこかのホテルのロビーのようだ。

フロントから黒沢が戻ってきて、エレベーターに行くように促される。

ここがどこかもわからないまま――

15 いっはどっ？（後書き）

今まで少しでも登場したとあるキャラクターが
気がついたらいなくなっていました。

別に忘れてたわけではなく、これから

また面倒なことを持つてくると思っていますが……

その前にひと段落つくでしょう…

16 愁傷様でした

状況がまだ呑み込めていない玉木にとりあえずシャワーを浴びるよう促した黒沢高志は、部屋の中央にある大きなベッドの上で一足先に横になっていた。

気分が悪いと言った彼女を休ませるために取ったホテル。ここがどいうホテルか玉木は気づいていないだろう。

と、そのとき、黒沢のケータイが鳴った。相手を確認してから電話に出る。

「もしもし。達夫か」

『うーっす。今どこにおるん？』

「ラブホ」

『マジ！？もうそんなとこまでいったんかい！確か、いきなりお見合いせんかって言うてきた変な親の娘やろ？』

「ああ。金持ちだし、世間知らずっぽいから楽勝だな。俺のこと好きみたいだし」

『ええなー。今回はがっぱり儲け^{もう}そうで。なんか協力してほしいことがあんなら言うんやで』

「今回は大丈夫そう・・・じゃあな」

玉木が浴室から出てきた気配がしたので、黒沢は慌てて電話を切る。些細なことでも気を抜くわけにはいかない。玉木の前では小学校時代の優しい男を演じなければならない。

これが成功するまでは。

気持ち悪い・・・玉木有子がシャワーを浴びた感想だった。酔いが醒めるどころかますます気分が悪くなっていく。

なんでだろう・・・普段はこんなに気持ち悪くならないのに。

家に帰りたくなつたが、その前にやらなければならないことがあることを思い出した。黒沢につきあえないって言わなければならないのだ。

服を着て出て行くと、ちょうど黒沢が誰かとケータイで電話しているところだつた。こつちには気づいていないようで、ベッドに座つて背を向けている。

「・・・・・・・・大丈夫・・・・・・・・」

最初に聞こえたのはその言葉だつた。

「それよりじーちゃんこそ無理すんなよ・・・・・・・・え？大丈夫だつて。お金なら俺がなんとかする。もうだいぶ溜まってきてるんだ」

それから二言三言話してケータイを切つた黒沢は突然玉木のほうを振り返つてきた。思わず立ち聞きしていた玉木は驚いて身構えてしまつた。

「びつくりした・・・・・・・・」

「あ、あの・・・・・・・・おじいさんどうかしたんですか・・・・・・・・」

おそろおそろ尋ねると、黒沢はきまり悪そうな顔で俯く。それが余計に気になつてしまつた。

「黒沢君・・・・・・・・私でよかつたら相談にのります」

玉木が隣に座ると、彼は顔を背けようとするが、それでもその口を開いてくれた。

「・・・・・・・・俺のじいちゃん・・・・・・・・病気なんだ。手術しないとやばいつて・・・・・・・・」

「うそ！」

そういえば、小学生の頃、黒沢は両親と離れて暮らしていると聞いたことがある。あの頃はおじいさんの家に預けられていたらしい。「あと半年もあればお金が溜まるんだ。だから頑張らなきゃ」

これは玉木からお金をもらつたためについた嘘だつたのだが、彼女にとつてそんなことを少しも疑う余地がなかった。

「いくら足りないんですか？」

「・・・・・・・・あと１５０万」

少しずつ少しずつ戻れなくなっていく。

「ほな！行こか！」

しばらく黙り込んでいた玉木が開口一番に言った言葉がそれだった。もう自分の思い通りに進んでいると思っていた黒沢高志は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐにいつものように柔和な笑みを浮かべた。

「行くつてどこに？」

「決まってる。ウチと遊んでる暇があんのやったら、地道に稼ぐべきや。はよ立ち！」

わけがわからぬまま立ち上がる。おかしい、いつもだったら大抵の女はここで金を貸してくれるはずなのに・・・

「ええっと・・・せつかく入ったのにもう出るの・・・？」

「くだいなあ。なんべん言わすんや。働かんとお金は入ってこないやろ？だつたら働く！」

「でも、今日は休みだよ・・・？」

「アホ！バイトでも探しい！」

まるで人が変わったかのように接する玉木にますます混乱してしまふ。そういえば、待ち合わせ場所に来た玉木は少しお酒臭かった。もしかして、酔っているのだろうか。

そこまで考えたとき、彼女はふらふらとした足取りでベッドに横になった。そして、そのまま寝入ってしまった。

「・・・・・・・・」

よく見なくてもかわいい。黒沢は確かに小学生の頃、玉木のが好きだったのだ。

ゆっくりとした動作で彼女にまたがる。当初の予定とは違ったが、今は純粹に1人の男として玉木を見ている自分に気づいた。

頭を下げていく。玉木の唇に触れるのはあと少し。

「……菅沼先生……」

玉木の声ではっとして顔を上げる。彼女は一筋の涙を流して、自分ではない誰かの名前を呟いた。それが男か女かもわからないが、直感でこれが玉木の好きな人だと気づいた。玉木の目にはもう自分は映っていない。

「バカだな……」

誰に対して呟いたのだろうか。もう1度黒沢は自分の顔を近づけていった。

ばたんっ！

その音は突然部屋中に響いた。驚いた黒沢が振り返ると、そこには黒いコートを着た少し暗い茶髪の若い男が立っていた。

「誰だ！？」

「どーも。名乗るほどの者じゃないんでお気になさらず」

どうやってここに入ってきたのか男はつかつかとベッドに歩み寄ってきて、寝ている玉木を見つめる。

「もし玉木先生があんたのことを好きだったら俺は完全に悪役だなあ……」

「なんなんだ、あんた……玉木の知り合いか！？どうやってここに入ってきた！？」

黒沢は混乱してまくしたてるが、男のほうはいたって冷静にベッドに座り込む。

「いえね、大阪に行った元教え子に頼んで玉木先生を捜してもらったんですよ。先生の家に電話かけたら映画見に行ったっていうしね。そしたら映画館の近くで具合悪そうにしている先生を男がホテルに連れ込んでるのを見たそうなんですよ。だから来てみたんですけど……」

割と早口で言い終えた後、玉木をちらりと見る。まだすーすーと寝息をたてている。

「寝込み襲うなんて最低だと思いますよ？」

「まだ何もしていない！」

慌てて弁解すると、今まで無表情だった男がようやく安堵の顔つきになったのは気のせいだろうか。それよりもこのままじゃやばいという危険信号が黒沢の中で鳴り続けている。

それにしてもこの男は何者なんだろう。先生と呼ぶのだからたぶん同じ教師なんだろうが・・・え？

そこでようやく玉木が呟いていた言葉を思い出した。

「あんた・・・もしかして菅沼・・・さん？」

「へー、俺のこと知ってるんですね、黒沢高志さん」

「なんで俺の名前・・・!!」

危険信号が警告音に変わる。男は愛想笑いを浮かべているだけなのに、それだけで怖い。これ以上関わり合いになりたくなかった。

しかし、極めつきはこれだった。

「新幹線の中でケータイ使ってるバカがいますね、ちよーっと会話聞いてたらよろしくない会話だったんで、懲らしめたんですよ。」

そっしたら、偶然電話の相手が黒沢さん、あなただったみたいです」

「・・・・・・・・・・」

達夫が東京に行っていたことを思い出した。なんて不運だったんだろう。

「あんまりこういうことはしないほうがいいと思いますよ？次に会ったら俺容赦しませんし」

黒沢の中で警告音が爆発した。

「『』愁傷様でした」

さいごにっこりと菅沼克也は微笑んだ。

16 一ご愁傷様でした（後書き）

ちなみに元教え子は玉木先生の顔を知らないのです

菅沼に特徴を言ってもらって捜したんだと思います。

見つかったのは小説だからなんでもあり、ということでは……

17 両想い（前書き）

文章量多くてすみません……

17 両想い

ブーン ブーン

ケータイのマナー音で目を覚ます。特に相手を確認することもなく玉木有子は電話に出た。

「もしもし」

『有子？あんた今どこにいるの？』

電話の相手は母だった。どこと言われても自分でもどこにいるのかわからないので、適当に生返事をする。

『今電話がかかってきたの。黒沢さんから、正式にお見合いをお断りしたいって。ちゃんと言ったのよね？』

「あああ・・・あつ！」

ようやく今日の出来事を思い出してはつとする。そうだ、確か黒沢はおじいさんが病気だと言っていたはずだ。

慌てて電話を切って周りを見渡すが、部屋の中には誰もいなかった。

「黒沢君！・・・いないの？」

時間からして自分が寝ていたのはどうやら10分くらいのようなのだ。それなのにどうして黒沢はいないのだろうか。それよりもなぜ寝てしまったのだろうか。

混乱する頭で部屋の窓から顔を出す。黒沢がいなかどうか捜すためだったが、玉木は思いもよらない人物を見ることになる。

「菅沼先生・・・？」

慌てて克也のケータイに電話してそこで待つように促し、玉木は部屋を飛び出した。

状況は全く理解できないが、ここに克也がいることは確かだ。とにかく手紙だけでなく、自分の言葉で謝らなければいけないと思っ

た。

「菅沼先生」

玉木を待っていてくれた克也はいつものように優しい表情で出迎えてくれた。彼を見ると、ますます罪悪感が胸に広がる。

2人は少し歩きながら話すことにした。玉木はもう覚悟ができていた。ここで自分の恋が終わることを・・・

「私・・・クリスマスイブの日、小学生のときの初恋の男の子とお見合いをしていました。黙っていてごめんなさい・・・・・・・・」

克也は答えない。無言が怒っているというサインなのかもしれない。

「菅沼先生は大人だけど、私はまだ子供でした。待つてくれた先生のことなんて考えずに自分のことしか考えませんでした・・・・・・・・」
言い訳をするつもりなんて全くなかった。ここでそれは見苦しいことのように思えたからだ。

あいかわらず克也は答えないが、やがて口を開いたかと思うと、それは玉木にとって意外な言葉だった。

「俺は大人なんかじゃないです・・・言わせてもらいますけど、イブの日、どうしてちゃんと連絡してくれなかったんですか」

「え・・・？留守電に入れましたけど・・・それに新幹線の中でケータイの電池が切れちゃって」

「あんな留守電の説明じゃあよくわかんないよ。それに、中途半端に待つてたらいろいろなこと考えて・・・頭半分で玉木先生になんかあったんじゃないかって思ったし、もう半分で約束をすつぽかされたことすげーショックだったし」

玉木は目をぱちくりとしながら早口で話す克也のことを見た。普段は聞くことがない克也の本音を聞いたような気がした。

「俺だけ楽しみにしてたのかなって思ったら・・・・・・・・なんか・・・もー・・・・・・・・」

「私だつてすごく楽しみだったんです・・・だけど、もし電話したら約束がなしになしになるような気がして」

「なしになんてしない。っていうか、補講がない日にまた誘うよ。
好きな人との初デートだったから」

今なんて・・・？好きな人・・・？

さりと告白されたような気がしたが、さすがに何かの聞き間違
いかと思つてそのまま固まる。

「もし・・・」

克也の言葉にはつとして顔を上げる。彼は歩きながら玉木を見て
いた。

「もし玉木先生がそのお見合い相手のことが好きなら、俺の言つた
ことは忘れてください。時間かかるけど、先生を好きでもちゃんと
普通に話せるように努力します」

少しだけ悲しそうな表情で言い放つ克也を見て、玉木は何も考え
ることなく言つた。

「違います！私・・・私もずっと菅沼先生のこと・・・好きでした・・・」

心臓が今にも爆発しそうだ。どくんどくと脈打つのがわかる。

やがて克也が優しく微笑んで小さく頷いた。

2人は自然に手を繋いで歩き出した。

「もしかして有子の彼氏！？」

玉木有子が実家に克也を連れて行くと、家にいたのは母と直子だ
けだった。玄関で出迎えてくれた瞬間、母はすぐに察して声をあげ
た。

「えっ？お姉ちゃんの彼氏！？」

母の声を聞きつけた直子が2階からドタバタと降りてくる。そし
て、克也を見て一瞬呆けた後、頬を赤くしていく。

「・・・つと、有子さんとおつきあいをさせていただいてる菅沼克也といえます。よろしくお願いします」

よくわからない敬語を使ってぺこりと頭を下げる克也。元々ここへ行きたいと言ったのは克也だったが、やっぱり緊張感は並大抵のものではないらしい。玉木もさつきから緊張しっぱなしだった。

と、そのとき、直子に腕を引つ張られて玉木はリビングのほうへ追いやられた。

「なに・・・？」

「めっちゃかっこいいじゃん！漁師と七福神と自由の女神が合体したような人なんじゃないの！？」

直子の興奮具合はすごいものだった。

「うん。でも、よく見たらそんなに似てないね。菅沼先生のほうがかっこいいな」

げんなりとする直子に気づかずに、玉木は玄関に戻る。ちょうど母に言われて家にあがるところだった克也は心底緊張しているように見えた。

「お父さんは？」

「奥にいるよ」

答えた母の声で一層緊張する克也。たぶん克也は今恐ろしい父を考えているんだろうなあと玉木には手に取るようにわかった。

「よっ！いらつしゃーい！」

誰のモノマネだ、とつつこみたくなるような父の出迎え方だった。たぶん状況に合わせてそれをやったんだろうが、あまりの寒さに玉木のほうが恥ずかしくなってしまった。

しかし、克也はイントネーションだけ真似して、

「お邪魔しまーす！」

ノリのいい人が好きな父はそれだけでハイテンションになった。

30分後、家は宴会場になる。

玉木はまた酔うのが嫌だったので、父に勧められても断り続けたが、克也はがぶがぶと飲んでいる。一瞬、夏休みのバーベキューのことを思い出してしまい、大丈夫だろうかと心配になってしまった。「いや、克也君のような人があるんやったら、有子は幸せ者や！どうか幸せにしてやってな！」

まるで結婚のことを言っているようで玉木は慌てた。

「すつ菅沼先生、ちよつとベランダにでも出ませんか？」

半ば強引に父から克也を離し、2階のベランダへと向かっていく。

ベランダに出ると、空には綺麗な星が広がっていた。そういえば、今日は大晦日だ。

「あと5分」

「えっ？なんですか？」

「あと5分で新年。俺の時計、電波なんで正確なんです」

克也は左手首の腕時計を示した。確かに、あと5分ちよつとで新年を迎えることになる。

いろいろあった。嬉しいことも楽しいことも、悲しいこともあった。だけど、最後にこんな幸せになった。

「今の俺の願いは、生徒がみんな希望する進路に進むことですけど・・・桜が咲いたら花見にでも行きませんか？」

生徒のことを第一に考えるとところが克也らしい。玉木は苦笑して頷いた。

と、そのとき、いつのまにいたのか直子が部屋の中からにやにとこつちを見ているのがわかった。酔っているためか、顔が赤い。

「あつや！キスでもしてたん？」

絶対酔ってる。玉木が真っ赤になって反論しようとしたとき、克也が先に答えた。

「3分以内に奪うつもり」

心臓が圧迫される。玉木は耳から煙が出てきそうなほど驚いた。

カウントダウンが始まる。

残り10秒。克也は玉木の頬に触れた。

残り5秒。ゆっくりと顔を近づけていく。

残り1秒。互いの唇が少し触れる。

ゼロ。その寸前で唇は完全に重なっていた。

「あけましておめでとう」

17 両想い（後書き）

またややこしいことが起こると思いますが、
とりあえずひと段落つきました。

次回も期待なく読んでくれれば嬉しいです。

18 受験勉強

1月7日、世間的には3学期が始まる。

受験生はセンター試験に向けて最後の追い込みをかけるが、成瀬弘樹はそれどころではなかった。

「はあ？まだお前、唯に本当のこと言っていないのかよ」

科学実験室。ここで勉強するのが最近の日課になってきている。使ってもいない克也自身も職員室よりもここを好むことが多かった。
・・・玉木とつきあうまでは。

「でも、驚いたなあ・・・玉木先生と克也がつきあうなんて。職場恋愛だな」

「誰にも言つなよ。生徒の進路が決定するまではケジメつけんだから」

「すげー心がけ。せいぜい頑張つて耐えろよ？」

「お前の進路が1番心配なんだよ！もつと追い込めー！」

実際、弘樹の模試の結果はEランクより上に上がったことはなかった。どの先生も言葉には出さないが、志望校を変えたほうがいいと考えているだろう。

「今は勉強の気分じゃないんだよ」

「坂井とは上手くいつてんだろ？クリスマススイブの日にお前ら見たけど」

「だけどさー・・・そのとき、年下には興味ないつてはつきり言われた」

そのときのことを思い出して、弘樹はげんなりとなる。弘樹はつきあいたいと思ったのに、どうやら向こうはそんなふうと考えていなかったようだ。期待させるようなことをするなと言いたいの。はこつちのセリフだ。

「そりゃー弘樹、そこは女心だろ」

克也からそんな言葉が出てくるなんて思わなかった。驚いてきよ

とんとすると、克也はけらけらと笑って弘樹の頭をぐしゃぐしゃと
してくる。

「大学に合格すればわかるよ」

本当にそうだろうか。

弘樹はまっすぐに家に戻らず、駅前の書店に寄る。いくつかの有
名大学の赤本を見つけ、手に取ってみるがすぐに元の位置に戻した。
「年下って・・・たった1日違いだろ・・・」

1日の違いで学年が変わった。それだけで年下だと感じてしまう
のだろうか。

女心がなんなのかわからない。そんなもやもやとした気持ちを抱
えたまま弘樹はバイト先へと向かった。

「弘樹、どうしたんだ？体調が悪いなら今日は早めにあがってもい
いぞ」

バイト先のラーメン屋、大将が心配そうに聞いてくる。弘樹はそ
の言葉で初めて目が覚めたようにはとなった。

「大丈夫です！週に1回しか働いていないので、バイトのある日は
頑張りますよ！」

「そうかい？それなら、これ1番テーブルに・・・」

大将はできあがったばかりの塩ラーメンを出す。

「はい！」

すっかりしなきゃとどんぶりを持って1番テーブルに向かう。余
計なことを考えるな。今はバイトに集中しろ・・・・・・・・・・と考え
ていたら、店の隅に克也がいることに気づいた。しかし、それに気
を取られて、弘樹はテーブルの脚につまづいてしまった。

持っていたどんぶりが傾いて、中のスープがこぼれていく。

びちゃあ・・・

1番テーブルに座っていた若い男の体に見事にかかってしまった。

「あつちい！！なにしゃがんだデメエ！！」

「あつすいません！すぐにタオル・・・！」

慌てて厨房へ行こうとしたが、いち早く動いたのは大将だった。

「申し訳ございません！ここの2階にお風呂場がありますからそこで洗い落としてください。汚れた服はこちらで責任を持って洗いますので」

「チツ・・・風呂は面倒だからいい。それより代えのTシャツ持ってきて来いよ」

幸い腕にしかかかってなかったから助かった。だけど、大将がTシャツを取りに行っている間、その若い男はきつと弘樹を睨みつけてきた。

「どう謝罪してくれんだろうな」

「あ・・・申し訳ございませんでした！！」

ぶんつと90度に頭を下げると、若い男が長い足を組んできたのがわかった。

「土下座しろ。この場で」

周りの客が動揺するのがわかった。そして、なによりも弘樹自身が動揺していた。

土下座・・・こんなにいるのに・・・・・・だけど・・・様々な思いが葛藤^{かつとう}する中、急に誰かがかつかと歩いてきてぽんと弘樹の頭に手を乗せた。一瞬、大将かと思ったが、どうやら克也のようだった。

「すいません！こいつの担任は俺です。俺からも謝ります。どうか許してやってください」

深々と頭を下げる克也。それを見て、若い男はますます調子に乗ってしまった。

「担任ならあんたが代わりに土下座しろよ」

さすがに言い返そうとした弘樹だが、軽く頭をぽんつと叩かれた。たぶん、何か言おうとした弘樹を制したのだろう。

克也はゆっくりとした動作で土下座して、深々と頭を下げた。

「お願いします」

なんでだよ・・・なんで克也が謝るんだよ・・・

やった張本人が土下座しなくて、その担任が土下座する・・・そんな光景が広がっていた。

そして、翌日。弘樹は進路指導室にいた。

最悪なことに、昨日の出来事の後、たまたま食べに来た進路指導の先生にバイトをしていることがバレてしまったのだ。

今はその先生が来るのを待っている。

自分はどうなるんだろうか。卒業延期にでもなるかもしれない。いや、もっとひどいことだったらどうしよう。

と、そのとき、進路指導室のドアががちゃつと開いた。昨日の先生が入ってくるのかと思っていたが、そこには克也の姿があった。

「小牧先生は・・・？」

進路指導の先生の所在を尋ねると、克也はただ首を振るだけだった。

「弘樹・・・お前唯や坂井のせいにしてんじゃねえよ」

「え？なにが・・・？」

なぜここで2人の名前が出てくるのか気になった。

「成績が上がなくてむしゃくしゃしてんの、2人のせいにするなつて言ってたんだよ」

「・・・」

そんなつもりはなかった・・・と思う。だけど、そのことが気になって勉強どころじゃないと言ったのも事実だった。

無意識に2人のせいにしてしまっていたのかもしれない自分に気

づいた。

「……克也だっと思ってんだろ。俺がY大なんて受かるわけないって」

どこか自嘲気味な声が出る。もう止まらなかった。

「わかってるよ。高望みだっただけのことぐらい。周りの目を見てりやあわかるよ」

「思っでないよ」

一言だけ克也は呟いた。

「思っでない。じゃなきゃ応援なんてしない」

弘樹が目をはちくりとさせると、進路指導室のドアが開いた。今度こそ小牧先生だと思ったが、顔を出したのは玉木だった。

「あの……もうすぐホームルームですけど……どうしましよう」

「玉木先生、代わりにお願いできますか？ついでにこいつも連れてつちやってください」

わけがわからなくて慌てて弘樹は克也を見る。

「なんでだよ？これから小牧先生が来るんだろ？」

「うん。大丈夫。俺がなんとかするから」

出た。克也の『なんとかする』が。克也がこう言うと、本当になんとかしてくれるんだ。

土下座したり、必死で頭を下げたり、克也はなんとかするために今までずっとこういうことをしてきたのだろうか。今それを考えると、いたたまれない気持ちになった。

「やあ少年」

その日の午後、克也に謝ろうとして科学実験室に来ると、なぜか坂井真琴の姿があった。

「え……坂井さん！？なんでここに……」

「暇な日にここに来るようにしたの。少年の家庭教師するためにね」
「家庭教師!？」

弘樹の声と共にがらつとドアが開いて克也が入ってくる。見ただけで事情を察したらしく、にやつと笑う。

「克也が頼んだのかよ!？」

「ちげーよ。ここで弘樹が落ちたら学年が2コ下になるから、なんとしても合格してほしいんだとよ。愛されてるねえ」

「とにかく!今日からびしびし行くからね!」

整った顔立ちが目の前で口元を引き締める。弘樹はやらなければならぬ境遇を誘った。

家庭教師をしてくれる真琴のためにも・・・自分のために頭を下げてくれた克也のためにも・・・

18 受験勉強（後書き）

9月7日に試験を受けるため、次回の更新は8日以降になると思います。

国家試験……結果次第でこの小説の
結末が変わってくるかもしれませんが……！頑張ろう！

次回で真琴の秘密が1つわかる……予定です。

19 お父さん

「で・・・どうだったの？」

坂井真琴はどう切り出せばいいのかわからず、自分でも驚くほどストレートに訊いてしまった。

「・・・落ちた」

実にストレートな答えだった。

Y 大学合格のために空いている時間は家庭教師として弘樹と一緒にいたが、後から成績はぐんぐん伸びてきて合格圏内にまで到達した。しかし、現実には甘くはなかった。

「俺、もし全部ダメだったら、浪人しようと思うんだ」

「浪人？だって私立の大学には受かったんじゃ・・・」

「そうだけど・・・このままじゃ悔しいから」

淡々とした口調で弘樹は述べるが、すごく強がっているわけではないことが声でわかった。

弘樹は本気なんだ。本気でそう言ってるんだ。

「わかった。でもまだ後期があるんでしょ？」

後期試験は前期試験よりも募集人数が少ない。そのため、倍率も高くなってしまうのだ。

「うん・・・あのさ、待っててくれる？」

「待ってるよ。私は執念深いからね」

「ははっサンキュー」

電話の向こうで笑ったのがわかり、真琴はほっとするのを感じた。大丈夫、きっと桜咲くから・・・

弘樹のセンター試験が終わってから、真琴の仕事は急に忙しくなった。正確には融通がきかなくなってしまったのだ。

「大丈夫？まだ時間あるから少し休んでこうか」

藤村が心配そうに尋ねてくるが、真琴は大丈夫だとそれを断った。
「休んだらいろいろ考えちゃうんです・・・あいつも今はこんなふうに不安なのかなって」

「真琴・・・自分の合格発表のときより緊張してない？」

「んー・・・同じくらいかも」

早いものであさつては弘樹の後期試験の合格発表の日だった。まるで自分のことのように緊張してしまい、今日は食欲がない。それでも必死になって栄養食品を喉に通した。

なんで他人のことでもこんなに緊張してるんだろ・・・

その理由になんとなく気づいていたが、弘樹の受験が終わるまでは言葉にするつもりはなかった。

と、そのとき、真琴のケータイが鳴った。マナーモードにするのを忘れていたらしい。

相手の名前を確認してから電話に出る。

「もしもし」

『・・・久しぶり』

「そうですね、お父さん・・・」

「やっぱわかんねえ・・・どういう関係なんだよ。克也と坂井さんって」

「どうもねえよ。昔生き別れた妹とか言っただけだよ」

どうしてもよさそうに答える克也に成瀬弘樹は不満になる。今2人が向かっている所は、真琴の実家近くだった。

県内でもかなり山。まるで獣道と思うような道路を通り、ようやくたどり着いたのが世間から隠れるようにひっそりと佇む^{たたず}一軒家だった。

「・・・なにここ」

「だから坂井んちだって」

克也は堂々とその家の庭に入っていく。弘樹も慌ててその後を追った。

「やばいつて！勝手に入っちゃ・・・」

「誰もいないんだよ」

「へ・・・？」

「ここは坂井の父親の家・・・もうこの世にはいないけどな」

坂井真琴が初めての映画の撮影を終えた頃、その人物は撮影場所近くまで来ていた。

お父さんと呼ぶにはまだ若いかもしれないその男は、真琴を見つけると紳士的な笑顔を浮かべて出迎えた。

「久しぶり、まこちゃん」

「・・・お久しぶりです」

固い表情で真琴は答える。どうしても敬語を使うことしかできなかった。

「仕事の都合で日本に来てね、由理子さんも明日の朝イチの飛行機でこっちに帰ってくるんだ」

「そうなんですか」

微妙な反応。真琴は上手く言葉にすることができなかった。まさかお父さんが20歳の男の人になるなんて・・・

「そうだ、まこちゃん夕ごはんもう食べた？」

「いえ・・・まだですけど」

「よかったら一緒に食べない？ネットでおすすめの店を見つけたんだ」

父は必死に真琴と仲良くしようとしていることがわかった。だからこそ、戸惑ってしまう。

「・・・食べます」

世間には知られていない家族。真琴はこのことを誰にも言ったこ

とがなかった。そして、これからも誰かに言うつもりもなかった。

そのとき、真琴は気づいていなかった。

まさかこのシーンをカメラで撮られていたなんて・・・

誰もいない一軒家に残る仏壇の前で合掌をする克也と、いまいち事情を呑みこめていない成瀬弘樹。

「なんで坂井さんの父親の命日にここに来るんだよ・・・」

さっぱりわからない。克也も真琴もなんの関係もないと言っているが、いくら高校の担任だったからと言って、実家の場所まで知っているなんておかしい。そう思い始めると、とことん気になってしまった。どうせ答えてくれないんだろうけど。

「・・・俺の先生だったからだよ」

合掌する手を下げて、克也は呟いた。

「先生？」

「うん。俺が高校生だった頃の担任だよ。病気で死んだ」

弘樹は何か言おうと言葉を探したが、何も浮かんでこなかった。

克也はそのまま続ける。

「結構面倒みてもらったからな。その関係でここに遊びに来たし、子供だった坂井真琴とも仲良くなった。先生が死ぬ間に真琴を頼むって言ったからあいつの親代わりするつもりだったけど・・・もう大丈夫みたいだな」

「大丈夫って・・・」

「坂井は弘樹に任せる。あいつ泣かせたらぶっ飛ばすからな」

「・・・うん」

初めて克也と真琴の絆に触れたような気がして、弘樹は言いようのない感情を覚えた。それと同時に疑っていた自分が恥ずかしい。

真琴は俺が守る・・・弘樹は決心した。

2日後、弘樹は受験の結果を知らせようと真琴に電話をかけたが、留守電になってしまった。仕方なく真琴の家に行って直接言いに行こうかと考えて出かけたとき、書店の前を通ってその記事を見つけてしまった。

『坂井真琴 深夜のデート!』

真琴にとつての初めてのスキヤンダルはそうして幕を開けた。

弘樹は何も信じられなくてその場に立ち尽くした。合格通知を強く握り締めながら・・・

19 お父さん（後書き）

1日更新が遅れました……；

次回はこの話の続きと、玉木有子が意外な行動に出る……予定です。

20 答え

時は少し遡る。

玉木有子がその話を知ったのは、冬休みが明けてすぐのことだった。

「海外研修……」

それは玉木たちの働く高校と姉妹校であるイギリスの高校で、交流を深めるために生徒の交換留学、そして教師の研修が行われているそう。

「あら、玉木先生。それに興味があるんですか？」

尾崎がひょつこりと現れて、玉木はどきつとしてしまった。克也とつきあう前から、尾崎が克也を好きなことを知っているからだ。知られてはいないが、どうも後ろめたくなってしまう。

「はっはい。やっぱり英語が好きなんで……」

「いい経験になると思うし、志願してみたらどうですか？向こうの高校は大きくて綺麗だって好評なんだそうですよ」

行ってみたい。何日か考えたが、日増しにその思いは強くなった。克也に相談してみようと思ったが、生徒たちのことを必死に考えている彼にこんなことを言うことができなかった。

そうしているうちに、志願締切日が近づいてきて……

玉木は志願してしまった。

「お父さんです……」

成瀬弘樹が週刊誌のことを問いたです前に、真琴は弁解をした。

「私の本当のお父さんはもう死んじゃってるの。写真に載ってたのは新しいお父さんで……まだハタチなんだ」

「若いね」

それが弘樹の反応だった。真琴は気まずそうにくくんと頷いた。

小さく載った深夜デートの記事だったが、今まで清廉潔白だった真琴の初めてのスキャンダルだってこともあり、昼頃から放送されるテレビでは割と大々的に放送されていた。ただ、さすがプロなだけあって、この記事を完璧に信じているわけではないようだったので安心した。

「お父さんが18で、お母さんが40歳・・・22歳の年の差で結婚したの」

愛に年の差は関係ないと言うが、実際に身近にそれを感じて弘樹は感心してしまった。

「そのときからかな・・・年下の男の人が苦手になったのは」

「坂井さんはお父さんのことが苦手なの？」

「そうじゃないけど・・・お父さんっていう年齢じゃなくて、上手く話せないんだ。どうすればいいんだろ・・・」

いつになく自信のない真琴の様子に弘樹は戸惑ったが、いつもと違って困り果てることなくけろっと答えた。

「お父さんとお母さんのところへ行ってみなよ。きっと答えが見つかるから」

「どういう意味・・・？」

「そのまんまの意味だよ」

答えがわからなかったわけではない。きっと真琴ならそれを見つかけられると思ったからこそその言葉だった。

そして、翌日・・・

「一昨日深夜デートが報じられましたが、実際はどうなんですか？」
記者からの質問に真琴は笑顔で答える。

「一緒にいたのは私のお父さんです。まだ若いんですけど、大切な家族と会っていただけなので・・・デートとかそういうものじゃ

ないんです」

照れくさそうに語る真琴の様子に、ワイドショーではこれは真実なんだと放送された。

その様子をテレビで見て、弘樹はほっとしていた。

「……少年の言ったとおりだね。両親の元へ行ったら、今まで考えていたことが全部吹っ飛んだよ」

隣で笑う真琴はテレビをぶちんと切った。

「もつとちゃんと話せばよかった」

「いいじゃん……話せたんだから」

「なんか少年が大人に見える……ムカツクなあ」

「克也に頼まれたんだよ。坂井をよろしくって。だから、ご両親が外国に行ったときは俺が親代わり」

弘樹は克也が行っていたことを思い出しながら言う。これで、今まで不思議に思っていたことがなんとなく繋がったような気がする。それと同時に、真琴は克也のことが好きなんじゃないかと考えたが、もうあまり気にならなかった。

「スガヤンに？そういえば、結構長い時間一緒にいたのに、なんでかスガヤンのことは1人の男の人として好きにならなかったんだよね」

「タイプじゃなかったんじゃない？」

「んー……っていうか、たぶんスガヤンに好きな人がいるの知ってたからなんだと思う」

「マジ！？あいつ、かなり遊んでただろ」

克也の昔話が聞けるかもしれないと思って弘樹はわくわくし始める。しかし、真琴の話を聞いていく内に、妙な引掛かりを覚えることになる。

「遊んでたね。しょっちゅういろんな女の子とデートしてたもん。だけど、スガヤンって本命がいたんだと思うよ」

「本命？」

「たぶんアキさんって人……無意識に呟いてたから」

アキ・・・？思いついた人物は1人しかいない。弘樹と唯がそうであるように、彼らも幼なじみだ。そういえば、昔克也が誰ともつきあわない長い時期があったが、確かそれは・・・弘樹の姉、亜紀が婚約したときじゃなかったか？

「あいつ、昔言ってた。1回だけ自分から告げてふられたことがあるって。たいして興味がなかったから深く考えなかったけど・・・」

それは真琴にとっても意外だったらしく、真剣な表情で弘樹を見る。

「克也の本命って・・・俺の姉ちゃんだったかも」

しかし、例えそれが事実だったにせよ、今は玉木とつきあっているのだ。克也の様子からして本気で好きみたいだから、今さら昔の好きな人が誰だろうと関係ないという結論になった。

「それより、今日は少年の合格祝いをする！なんかほしいものある？」

真琴が嬉しそうに言うので、弘樹は考えてしまった。しかし、すぐにぴんときた。

「じゃあ・・・少年じゃなくて、俺のこと名前で呼んでほしいな」

「そんなんでもいいの？」

わくわくしながら弘樹はそのときを待つ。しかし、真琴は急に思いつめたような表情になって、

「却下」

「はあ！？なんで？」

「却下って言ったら却下」

なぜか名前だけは呼んでくれなかった。

その頃、春休みの学校で・・・

今年の生物の試験をコピーしようと印刷室に入った菅沼克也は先にいた玉木を見つけた。彼女は壁に貼ってある去年の花火大会のチラシをぼーっと眺めていた。

「よかつたら夏休みに一緒に行きませんか？」

声をかけると、玉木は驚いたような顔からすぐに嬉しそうな表情に変わる。しかし、それもまたすぐにしぼんでしまった。

「い、行きたいんですけど・・・今年、私・・・海外研修に行くことにしたんです・・・」

「え・・・」

海外研修。確か、英語の教師を限定にイギリスの姉妹校に留学するものだった。毎年行っているわけではないが、以前はベテランの英語の先生が1年近く研修に行ったはずだ。

「え・・・マジ、ですか・・・」

「はい！イギリスは私の夢だったし、いい機会だから行こうと思ったんです」

克也の心情をよそに、玉木は嬉しそうに言う。

「なんで・・・俺に一言言ってくれなかつたんですか？」

「言おうとは思ってたんですけど、生徒たちが大変なときに私の小さなことを相談するわけにはいきませんでしたし・・・」

それでも一言ぐらい言っただけだった。玉木は小さなことと言うが、克也にとって1年も会えないなんて正直嫌だった。玉木は平気なんだろうか。玉木にとって1年会えないことは小さいことなのだろうか。

「菅沼先生に会えないのは寂しいですけど・・・一生の別れてわけじゃないんで大丈夫です！」

その言葉に、克也は心臓が重たくなるのを感じた。

「玉木先生にとって・・・俺ってなんなんですか・・・」

たったそれだけ言い残して、克也は印刷室を去った。

20 答え（後書き）

スキャンダルをきっかけに、
ようやく弘樹たちも明るくなりそうです。

反対に、なんだか雲行きがおかしい克也たち…
そろそろ忘れかけていたあの人がまた出てきます。

21 克也と玉木

3月最後の補講の日、玉木有子が学校へ行くと、ちょうど職員玄関の近くで克也の姿を見つけた。昨日のことを謝らなきゃと思い、思わず声をかけた。

「菅沼先生」

克也はちらりとこっちを見たが、まだ怒っているのがわかった。

玉木は焦りながらも次の言葉を考える。

「昨日のことなんですけど・・・」

「あれは俺が悪かったです。言い過ぎたなって思いました」

やっぱり怒ってる。昨日一晩でいろいろと考えたことが再び玉木の頭の中に蘇ってきた。もし別れようとか言われたら・・・もし気づかずに克也を傷つけていたら・・・間違いなく傷つけていたことはわかった。最低だ・・・

別れようって言われたらどうしよう・・・どうしよう・・・

「玉木先生・・・？」

克也を傷つけてばかりだ・・・

「ごめんなさい・・・私、自分のことしか考えてなくて・・・先生のこと傷つけてばかりです・・・もうこれ以上先生に迷惑かけたくない、から・・・わ」

「言っな！」

玉木の言葉を廊下中に響き渡る声で遮る克也。びくつとして顔を上げると、克也は俯いて口元をきつく結んでいるのがわかった。

「聞きたくないです・・・これ以上。そんな理由で別れるなんて言わないでください・・・」

「あ・・・ごめんなさい・・・」

「玉木先生が俺のこと嫌いになったら、そのときは潔くあきらめるけど・・・そんな理由だったら俺は別れるつもりないから・・・」
それだけ言っただけで克也は職員室へ向かっていく。

さっき自分が言いそうになった言葉を思い出して玉木は泣きそうになってしまった。その言葉で、また克也を傷つけたから……

「あのなあ……普通デートの待ち合わせ場所が母校の科学実験室なんてありえないだろ」

うんざりとした表情をする菅沼克也とは異なり、弘樹は嬉しそうに笑う。

「だってここが1番安全だし」

「お前悩みなんでなさそうでいいなあ……」

と、そのとき、ドアが開いて、帽子にサングラスをかけた女の子が顔を出した。

「あれっスガヤンがいる」

「だーかーらー……ここは俺の縄張りだっつの」

だんだん自分がここにいる理由がわからなくなって克也はすごすごと教室を去っていきこうとする。しかし、それを弘樹の言葉で遮られた。

「しばらく会えないと思って、玉木先生が自分に相談もなく海外研修を決めちゃったことをイジけてる克也君にアドバイス。先生を泣かせちゃだめだよ」

「お前……なんで知ってんだよ!？」

さすがに驚いて問いたですと、弘樹はにーっと笑って見てくる。

「さっき玉木先生が元気なさそうに歩いてたから声かけたんだ。そのついでに少し相談にのってあげただけ」

何も言えずにそのままドアの向こうに立ち去る。まさか弘樹から助言をもらう日が来るなんて思わなかった。

もう今日は学校が終わりだ。克也はある場所へと向かった。

ピンポン

夕方、玉木のマンションの玄関口でインターホンを押すと、「はい・・・」という元氣のない声が返ってきた。

「菅沼です」

『すがつ・・・菅沼先生！？どどどどうしたんですか！！』

「話があるんです。開けてもらえませんか？」

『はっはい・・・』

ドアが開く。まるで不安に思っている玉木の心情を表すかのようにゆっくりと。

克也は中に入ってしまった。

「まず謝ります。朝、怒鳴ったこと・・・」

突然の克也の訪問に驚いたが、玉木有子は一瞬で部屋の片付けを終わらせて彼を迎えることができた。そして、リビングで克也が最初に言った言葉だった。

「・・・俺、すげー小さい男でした」

「いいえ・・・私も何も言わなかったし、それに・・・あっさりいってらっしゃいって言われるほうが嫌です」

心からの言葉を言うと、克也は安心した表情をする。こういうところに妙に親近感がわいてしまう。いつもしっかりとして男らしい克也だが、たまに見せる子供っぽいところがかわいいと感じてしまう。

玉木はコーヒーを淹れたマグカップをテーブルに置き、克也の向かい側に座った。

「いつからなんですか？」

「7月の後半から1ヶ月間・・・夏休みの間です」

「へ？」

何に驚いているかは知らないが、玉木はもう何も隠さずに話すこ

とを決めた。まさか1年会えないと克也が考えていたなんて彼女が知るよしもない。

それよりも玉木は言いようのない不安が胸の中を渦巻いていた。

「あの、菅沼先生・・・先生がいろいろな人から人気があつて、すごくモテモテだったんだってことはわかつてます。先生には私みたいな地味な女は似合わないってことも。だ・・・」

「待つてよ！」

「だけど！」

克也の言葉で遮られそうになるのを玉木はさらに大きな声で制した。自分の気持ちを言うために。

「だけど・・・わかつてるけど・・・私は、菅沼先生のこと・・・誰よりも好きです！」

「スガヤンって手が早そうだね」

ショッピングモールで靴を見ているとき、ふと真琴が呟いた。それを聞いた成瀬弘樹は苦笑してそれに答える。

「早いだろうなあ・・・でも今回は3ヶ月あつてもたぶんまだ何もしてないからな・・・」

よく耐えられるよなと考えていたが、その頃克也がどのような行動を取っているかは弘樹には全く想像がつかなかった。

気がついたら克也が傍に来ていて、驚く間もなく唇を押し当てられていた。

「・・・っ！」

初めてのときとは違う、角度を変えて何度も押し当ててくる。力に負けて玉木有子はそのまま体を押し倒されてしまう。

「すがっ……せん……待って！」

慌てて克也の体を押すと、はっとしたような表情で彼は固まる。びっくりした……

玉木は心臓がばくばくと音をたてるのを感じていた。顔が真っ赤になったまま起き上がれなくなってしまった。

「あんま……かわいいこと言わんでください……俺、絶対手出しちゃうから」

克也の声は今のことを後悔しているようにも聞こえた。恋愛に不慣れだから、こういうとき玉木はどうすればいいのかわからない。だけど、怖いものなんて何も感じていなかった。

だから、ゆっくりと手を伸ばして、克也の手を握る。

「玉木先生……？」

顔を真っ赤にして玉木はぎゅっと目を閉じた。

部屋の電気は全て消してくださいとお願いしたが、克也はベッドの近くにあるスタンドだけは消してくれなかった。妙に明るさを感じながら、玉木はベッドに座りこむ。

「なんか照れますね」

苦笑しながら克也もベッドの隅に座りこんだ。ベッドが少し揺れる。

「緊張します……」

「俺も……こんな緊張するの初めてかもしれない」

心臓が爆発しそうだ。玉木は一生懸命抑えようとしているが、目の前に克也がいると思うとそれだけで無意味な行動になる。

「……心の準備ができ……ました」

小さく声を振り絞ると、克也の右手が玉木の左肩に触れ、そのまま優しく押し倒された。そして、玉木に覆い被さるように肘をついて顔を近づける。

「大丈夫……リラックスして……」

「・・・はい」

克也の配慮が嬉しくて、玉木は自然に笑顔になった。同時に克也も笑顔になる。

後は自然に、2人は唇を合わせた。

21 克也と玉木（後書き）

今思っただんですけど、なんで玉木は下の名前で書いてないんだろう……特に深い意味はありませんが。

次回はこの続きです（うわー）
きっともうすぐ最終回になると思います。

22 動き出す歯車（前書き）

今回恋愛度が高めです。

急にこんな展開になってびっくりです。

22 動き出す歯車

失礼な話だが、26年間生きてきて、菅沼克也は決して女性の経験が少ないほうではない。

高校生だったとき、確かに亜紀が好きだったが、それでもそのときにつきあった女の子を抱いたし、亜紀にふられてからも大学の女の子とつきあって夜を過ごした。

だけど、こんなに緊張した夜はなかった。

ある意味で、本当に好きな人と初めてだったからかもしれない。

「あつ……」

静かな部屋に響くのは、互いの呼吸の音と、ベッドがきしむ音と、時々発する玉木の声だけだった。

軽いキスの後唇を吸うと、玉木はぎゅっと目をつむって克也の腕を掴んできた。

やっぱり怖いのもかもしれない。今日は優しくしよう。

と、最初は思ったのだが、すでに自分の中の感情が理性では抑えられずにいた。息をする暇を与えないほど貪るようにキスをする。

それから、玉木の首筋に顔をうずめて何度も唇を這わせた。その度に彼女が小さく、耐えるような声を出すのがかわいくて、ますます克也の中の男としての欲望が大きくなってしまふ。

「……痛かったら、言ってください」

30分くらいたって克也がそう言うのと、玉木は目を開けて少しだけ笑った。だけど、自分が動き出してからその顔は痛みに耐えるような表情へと変わっていく。痛いのは見てわかるんだけど、それを言うつもりはないらしい。

「ごめん……」

玉木が必死に耐えているのに、それさえも克也は愛おしくな^{いと}って

しまった。

やべえ……

克也が現実に戻ったのは翌朝、目を覚ましたときだった。隣でまだ玉木は寝ているようで、その寝顔を見ながら昨夜の自分を思い出す。

初めてだから優しくしようって思っていたのに、だんだん我慢できなくなってしまった。

やっべえ……すげーよかった……

体の相性があるとするなら、克也にとって玉木が1番なんじゃないかと思うほどよかった。それに、こんなに緊張したのも初めてだった。

玉木先生、大丈夫かな……痛かったよな……

と、そのとき、ベッドが揺れて玉木が起き上がったのがわかった。毛布を肩までかぶり、全身を隠すようにして克也を見る。

「おはようございます」

2人の声が同時に重なる。たったそれだけのことでなぜか笑えてしまった。

「あの……大丈夫ですか……痛かった、ですよね……？」

おそるおそる尋ねてみると、玉木は恥ずかしそうに俯いた。

「最初は、少し痛かったです……でも、その後からは大丈夫でした……」

「……そっか」

「菅沼先生が私のために優しくしてくれて嬉しかったです」

やばい……マジかわいいんですけど……

優しく微笑む玉木を見て、克也は自分が赤面するのを感じていた。

同じ頃、早々とバイト先に向かっていた成瀬弘樹は、横断歩道の前で信号が青の点滅になっていたので、すぐに赤になると察して自転車をこぐのをやめた。

大通り。まだ朝なのに目の前を車が何台も通っている。

しかし、弘樹はゆつくりと通り過ぎていく車の中の1台に釘づけになってしまった。元々視力は良かったし、テニスで鍛えた動体視力だつてある。

だから、見えた。

見たことがある車に、弘樹のよく知っている人の運転する車に唯が乗っているところを。

「唯！」

飛び出そうとしたとき、すでに信号は変わっていて、目の前を車が通り過ぎていく。

今見たことが信じられなかった。

まさか・・・まさか・・・唯が・・・

「僕らの関係も・・・もう1年になるね」

「うん・・・タイムリミットが近づいてきたんだね・・・」

菅沼唯はわかっていた。この関係が1年で終わるということが。そういう約束だったから。

初めてその人を見たとき、唯は一目惚れをしてしまった。まるで電撃が走ったかのように感じた。それから、内気な自分が自ら話しかけて知り合った。奥さんがいることを知っていながら・・・

「1年間でいいんです！誰にも迷惑をかけません！あなたの恋人にしてください！」

迷惑をかけないと言いながら思いつきり迷惑をかけながら言った言葉は、最初は受け入れてもらえなかった。だけど、お願いしますお願いしますと頼み込んでようやく受け入れてくれたとき、唯は高

校を卒業していた。

1年間、デートしたり、ごはんを食べに行ったりする日々が続いた。

彼は奥さんを愛していたので、唯とはデート以上のことはしなかった。

それで唯は満足だった。

「最後に思い出を作らない・・・？」

「え・・・？」

「僕たちが恋人だったって証。君の体にも心にも、僕を焼き付けたんだ」

それが何を意味するのか唯は知っていた。だけど、何も言うことができなかった。

彼は懐ふところから自分の名刺を取り出して、その裏に日にちとどこかのホテルの名前を書いた。

「ここで待つてるから」

4月1日、唯の誕生日だった。

菅沼克也が帰宅すると、リビングに亜紀の姿があった。不意打ちだったので驚いたが、母がにこにここと笑って「今日帰ってきたんだって」と教えてくれると、なんとなく安心して彼女に声をかける。

「よー亜紀」

「かつちゃん！急にお邪魔してごめんね？」

「いーよいーよ。帰ってくるって弘樹から聞いてなかったから少し驚いただけ」

「そうだ・・・弘樹なんだけど、なんかあった？あんまり元気ないようだったけど」

思い当たる節がなくて、克也は首を傾げる。最後に会ったのは真琴とデートするときだったから、彼女とケンカでもしたのだろうか。「あ・・あのさ！かつちゃんの部屋に行ってもいい？」

「え、ああ・・いいよ」

やや躊躇したのは、もちろん玉木がいてこそだったが、結婚した人妻を部屋に連れ込む後ろめたさがあったからだ。

それにしても、亜紀の様子がおかしい。まるで無理してテンションを上げているようだ。

「わあ・・全然変わってない・・！」

克也の部屋に入った亜紀は開口一番にそう言った。

「そうか？これでもいろいろ捨てるモン捨てたけどな」

亜紀は嬉しそうに周りを見渡してから、くるっとこっちを向いた。

「懐かしいね。あの頃に戻ったみたい」

「そうだなあ・・よくお前家に遊びに来てたからな・・ちっさい弘樹連れて」

「・・・・・あの頃に戻りたいなあ・・」

そんなふうに呟かれるものだから、一瞬焦ってしまった。たぶん以前の自分だったらここで何かしてしまうところだが、今の克也はそんなことはなかった。だけど、彼女の真意を知りたくなる前に一旦ここから出ようと思った。

「俺さ、昨日からずっとこの格好なんだ。着替えてくるからちよつと待ってて」

身近にあったジャージを掴んだが、それよりも先に亜紀が声を出した。

「昨日・・・どこ行ってたの？」

「・・・・・彼女ントコ」

正直に答えて部屋を出て行こうとしたが、それでも亜紀は早口で喋りだす。

「まだ遊んでるの？」

さすがにむっとなつて克也は振り返った。

「遊んでねえよ！俺は本気で・・・」

「私だつて本気だつたよ！！」

気づくと、克也はぎゅっとなきしめられてドアに背をついた。亜

紀はその手を離そうとはしなかった。

「好き・・・」

絶対に言つてはならない言葉を口にした。彼女が8年前、言えなかった言葉を。

22 動き出す歯車（後書き）

なんかすいません…？

もうちょっと文章力を上げたいです。

23 嫌な予感

夜7時、成瀬弘樹は菅沼家を訪問した。

「弘樹君じゃない！さっき亜紀ちゃんがここに来たよ」

「姉ちゃんが・・・？」

唯と克也の母にそう言われて弘樹はきよとなった。それから最悪な考えが頭の中に浮かんできた。

もしかしたら、亜紀は旦那が唯と会っていることを知っているのかもしれない。今日はそのことで唯に怒鳴り込むつもりできたのかもしれない。

「おばさん、唯いる？」

「まだ帰ってきてないみたいだねえ。克也ならいるから部屋にいると思うよ」

「じゃあちよつとお邪魔します」

すでに亜紀が帰ったものだと思い込んで弘樹は2階の克也の部屋へと駆け上がった。いった。

その少し前、菅沼克也は亜紀と一緒に自分の部屋の中にいた。ドアに背を預け、亜紀に抱きしめられる状態で。

しばらくいろいろな考えをめぐらせたが、意外にも自分の頭の中は冷静に判断することができた。

だから、ゆつくりと亜紀の肩を押した。

「・・・かつちゃん？」

「確かに8年前までは・・・っていうか、1年くらい前までの自分だったら、亜紀にそう言われたら嬉しくて今頃何してるかわかんねえ」

「・・・」

「だけど、さつきも言ったけど、マジで好きな人ができたんだ。他の人のことその人以上に想えない・・・ごめんな？」

はつきりと言い放つと、亜紀は俯いたまま小さく頷いた。少し押しただけでそのまま倒れてしまいそうな錯覚を覚えて不安になる。それと同時に、急にこんなことを言ってきた理由が気になってしまった。

「かつちゃんは・・・その彼女のことが大好きなんだね」

「うん・・・あのさ、何かあったのか？俺で良ければ相談になるよ」

しかし、亜紀は何も言おうとしない。ただ黙ったまま俯いていたが、やがて顔を上げたかと思うと、静かな、しかしはつきりとした声で言った。

「お願い・・・キスして・・・」

ただ懇願するように、瞳を潤ませて。

2人の会話をドアの外で聞いてしまった成瀬弘樹はいよいよやばいと思った。

もし克也が亜紀の告白を受け入れてしまったら、姉と義兄が別れることになる、家族がぎこちなく、菅沼家ともぎくしゃくした関係になると思う。すさんだ未来家系図を想像して、なんとしても阻止しなきゃと思った。

「ちよつと待ったあ!!」

勢いよくドアを開けると、ちょうどドアの傍にいた克也にばんつと当たった。ぐえつとカエルが潰れたような声したが、無視して亜紀に詰め寄る。

「だめだ！そんなことしちゃ・・・!」

「弘樹!」

「姉ちゃんがこいつを好きだったのは昔の話だろ!?今は誰が好き

なんだよ!？」

こいつ呼ばわりされた克也は痛そうに背中を押さえながら、ばし
っと弘樹にツツコミを入れる。対する亜紀は困ったような顔をして
しまった。

「とにかく・・・俺がなんとかするから!」

「知ってるの・・・?」

亜紀が驚いたように尋ねる。弘樹は黙って頷いた。

「全部知ってる。だけど・・・だからってこれじゃあ、だめだろ」

「わかってるけど・・・どうしようもないんだもん」

「だから、俺がなんとかする」

克也の受け売りの『なんとかする』。弘樹にそれができるかどうかは
わからないが、やってみるしかなかった。

亜紀のためにも、克也のためにも、旦那のためにも、玉木のため
にも、唯のためにも・・・そして、自分のためにも。

「待てよ!弘樹!」

弘樹が部屋を出ると、ただ1人事情を理解していない克也が追いか
けてきた。割と乱暴に後ろ首を掴まれたので、とっさに腕が克也
のほうに伸びてしまった。瞬間的によけた克也の手が弘樹から離れ
る。その拍子に弘樹はバランスを崩してしまった。

「わっ・・・」

目の前に広がるのは、下へと続く階段。落ちる・・・と思ったと
き、また後ろから腕を掴まれて強引に引っ張られた。

「あつぶね・・・」

間一髪で克也に助けられたらしい。気がつくのと克也の腹の上に乗
っている形になっていた。

「ワリイ・・・」

「それより、意味わかんねえよ。お前どこ行くつもりだよ?」

「克也には関係ない」

と言ったのも事実だが、本当は関わってほしくないということのほうが大きかった。もし唯が不倫していると知ったら、きっと克也はするすると引きずるくらい負い目を感じてしまうだろう。

とにかくその場から離れようと立ち上がろうとしたが、弘樹は克也によってまた腕を引つ張られて尻餅をついた。いい加減痛みが体に伝わってくる。

「何すんだよっ！」

「なんか嫌な予感がする。やめとけ」

「はあ！？意味わかんねえよ」

「こういうカンは昔から当たんだよ。何するのか知んないけど、とにかくやめとけ」

弘樹は克也の忠告を無視して階段を駆け下りる。しかし、このときは気づいていなかった。まさか克也の言葉が現実になるなんて……

「真琴、1日早いけど誕生日おめでとう！」

その言葉と共に、マネージャーの藤村が差し出したのはかわいくラッピングされた袋だった。

「わー！ありがとうございます！開けてもいいですか？」

「オッケー」

坂井真琴が袋を開けてみると、ずっとほしいと思っていたペンダントが入っていた。この値段を知っていたため、真琴は嬉しさと共に申し訳なく思ってしまった。

「すっごい嬉しいです……ありがとうございます……」

「気に入ってもらえたら嬉しいな……そうだ、明日は弘樹君と過ごすの？」

真琴は恥ずかしそうに俯いたが、小さく答えた。

「1日は私の誕生日だし、2日はあいつの誕生日だから、一緒に過

「ごせたらなーって思ってます」

そこまで言うと、藤村がニヤニヤと笑っているのがわかった。真琴は慌てて言葉を付け足す。

「あ・・・ついからですから。大丈夫、次の日の仕事には何も影響ないですから」

「はいはい。スキャンダルだけには注意してよ・・・っれ？」

「どうしたんですか？」

藤村が奇妙な声を出したことで疑問に思う。最初藤村はジープンのポケットを探っていたのだが、何もなかったらしく次にバッグを探し始める。

「ないのよ。ケータイが」

「どこかに忘れてきちゃったんじゃないですか」

「そうかもしれない。ちよつと事務所に戻ってもいい？」

藤村が出て行ったので暇になった真琴は、車のカーナビゲーションについているテレビをつけた。

そこで見てしまった。

真実を告げる者の姿を。自分の知らぬ間に告げられていた。

「おばあちゃん・・・」

幸せが音をたてて崩れていくのを感じた。

それと同時に隣に黒い車が停まって、中から人が出てきた。がちやんと真琴が座る助手席を開けて出てくるように促す。

幸せだったなあ・・・

ありがとう・・みんな。感謝してます。

弘樹・・・ごめん。約束守れそうにないや・・・

それは、あまりにも突然な別離の知らせだった。

23 嫌な予感（後書き）

現時点では何が起こったのかさっぱりわからないです。
最終回がいつになるのかはわかりませんが、

これが最後のややこしい出来事になると思います。

できればもう少し彼らの話におつきあいください。

24 なんとかする

とにかく唯を捜さない。

その思いで一睡もすることなく自分の部屋の窓から唯が帰ってくるのを待っていたのだが、結局彼女が帰ってくることはなかった。ちなみに、唯とは隣どおしの家ではないが、たいてい自分の家の前の道を通るので帰ってきていないことがわかった。

警察の張り込みで大変なんだと能天気なことを考えながら、成瀬弘樹はそのときを待っていた。

ケータイに電話しても出ない。メールを送っても返事は来ない。唯に会ってどうするつもりなのかはまだ考えていないが、とにかく会って話しかかった。

ブーン ブーン

ケータイが鳴ったのは4月1日の午前5時だった。

慌ててケータイを開けると、唯からのメールの返信が来ていた。

弘樹が話があると送ったメールの返事のようなだった。

『話ってなに？メールで言えないこと？』

実に単純明快でわかりやすいメールだった。弘樹は少し迷った後、会って話したいことがあるという内容で再度メールを送る。

『わかった 駅前のマックで待つてるね』

時間の指定もなく、そっけない唯からのメール。弘樹にとって、唯は幼なじみである前に好きだった人だ。それだけでも心配になってしまった。

そのとき、すぐにケータイが鳴った。唯からのメールだと思って慌ててディスプレイを見ると……

そんなメールのやり取りを終えてから20分後、自転車でかつ飛ばしてきた弘樹がマックに入っていくのを、菅沼唯は駅前にあるビジネスホテルから見下ろしていた。

たぶん全て見透かされているんだ。ここからでも、あんなに汗だくになっているのが見えた。

ありがとう……すごく嬉しい。

自分の間違いを許してくれない人がいて……

ひとつ息をついてから、唯は背後に向き直る。そこにはノートパソコンを前にカタカタと文章を打っていくサラリーマンの姿が見えた。

しばらくじっと見ていたが、やがて唯の視線に気づいたらしく、優しい笑みを浮かべてこっちを見てきた。

「どうしたの？唯ちゃん」

「そろそろだと思って」

「ん……心の準備ができたんだね」

その声と共に、ぱたんとノートパソコンを閉じる。そして、ゆっくりと男が近づいてきた。

唯は動かない。よく見ると亜紀の旦那さんに似ていると後で思ったその顔を睨みつける。

正面から見たらあんまり似てないな……

「田口さん……」

唯は男の名前を呟き、

「ごめんなさい！私にはできません！」

はつきりと言い放った。

「できない……で済むと思ってんのか」

「え……？」

不倫相手、田口の言葉は唯が想像していた言葉とは全然違ってい

た。

「散々人に迷惑をかけながら今さらできないで済むと思ってん．．．

」

ぞくつとするほどの冷たい空気が体中を帯びていく。１年間見てきた田口のどんな顔とも違う顔がそこにはあった。

怖い．．．！最初に思った言葉はそれだった。

「ごめんなさ．．．」

そこまで言いかけたところで、唯の手ががしつと掴まれていることに気づいた。驚くと同時に田口が力ずくで唯の服を脱がそうしてくる。

「いやあっ．．．．．！」

恐怖で体の力が入らない。必死で抵抗しようと思っても女の力では敵わなかった。

助けて．．．お願い！ヒロ君．．．．．助けて！

「ヒロ君！！」

バンッ！！

突然のドアの開く音。何事か一瞬田口が止まったところで、さすが唯はその場から飛び出した。

そして、入ってきたある人物を見た。

「ヒロ君．．．！」

「唯！こっち来い！」

言われるがままに弘樹の元へ駆け寄る。彼に肩を抱かれ、そのまま後ろへとかばわれる。

「どうしてここに．．．！？」

「マックから見えた。泣きそうな顔で見下ろしてる唯の姿。ちゃっちーホテルで助かったよ」

成瀬弘樹は右手をぶんぶんと振りながら、田口を睨みつける。田

口はというと、渋い顔でなぜか枕元のスタンドを見ている。

「唯は返してもらいます。詳しい事情は知りませんが、もう関わることはやめてください」

それだけ言つてホテルを後にしてドアを開けたとき、田口が何かを呟くのがわかった。そして、気づいたときには背中側の服を掴まれて……振り返った瞬間、顔を思いつき殴られた。

ガターン

あまりにもあつけない一撃。しかし、とつさに避けるなんてことをこの狭い部屋で行うことは不可能に近かった。

「ヒロ君!!」

クソッ……俺は平和主義者なんだよ。

心の中で言い訳しながら、弘樹は切れた口の端を押さえて起き上がる。しかし、何度か腹に足蹴りを入れられて、さすがに息が詰まってしまった。

「田口さん! もうやめてっ! この人は関係ないでしょ!」

唯の泣き叫ぶ声を聞いて、痛む腹を押さえてなんとか起き上がる。彼女に離れているように促して立ち上がる。

「なんとかする」

ただそれだけしか言つて、目の前にいる田口という男を睨みつける。

「あれ……? 達夫じゃん」

その緊迫した状況の中、最初に声を出したのは、第三者である菅沼克也だった。いつのまに背後にいたのかきよんとした顔で立っている。

「克也……お前いつのまに……」

「お前追ってここまで来たんだけど、なに？達夫と知り合いなの？」

一瞬、弘樹は田口と克也が知り合いなのかと思っただけ、目の前にいる田口の様子がおかしくなっていくことに気づいて疑問を覚える。

「田口・・・さんと知り合いなのか？」

弘樹の質問に、まるで全てを理解したかのように克也は無表情で田口を見る。

「いや、ちよつと前に知り合っただけだよ。へー・・・アンタ田口達夫っていうんだ」

興味深そうに言っているが、克也の口調からその様子は感じられない。むしろ怒気さえ含んでいるように思われる。

克也は無言で部屋の中に入っていくと、中央にいた田口達夫とかいう男の前にすっと座った。

「まだ懲りてなかったの？」

たったそれだけの言葉で。田口は悲鳴を上げて逃げるようにその場を去っていった。

何が起こったかわからない弘樹と唯はただ立ち尽くすだけだったが、克也がくるりと振り返って、

「帰ろう」

と言ったから全ての力が抜けてしまった。情けなく弘樹はその場にすっと座り込んでしまった。

「弘樹・・・立てるか？とにかく今は行かないと」

「・・・どこにだよ」

弘樹としては腹の痛みが治まるまではもう少し休憩していたかったのだが、克也はそれを許してくれないようだった。

「亜紀に聞いたよ。たぶんお前勘違いしてると思うけど・・・唯の相手は亜紀の旦那さんじゃないからな」

「わかってる。さっき電話があった・・・顔立ちが似てたから勘違いしたんだ」

唯からマツクで待っているとメールがあつたすぐ後、亜紀の旦那、修一から1日早い誕生日おめでとうメールが届いたのだ。どうやら出張で今はアメリカにいるらしい。

だから、どうして亜紀が克也に告白したのかはわからないが、それよりも克也が深刻な表情をしていることが気になってしまった。

「・・・・・・・・克也？」

「なあ・・・・・・・・なんで俺が坂井の保証人やってたか知ってるか？」

24 なんとかする（後書き）

次で最終回になる予定です。

今までにないほど消化不良で終わるかも…

彼らのその後は番外編で書きたいと思っています。

感想・意見を頂けると嬉しいです。

25 会いたい（前書き）

最終回のつもりで書いたんですが
長すぎたんで2つに分けました。
今回は短めで、最終回は次にします。

25 会いたい

克也の運転する車に乗りながら、成瀬弘樹は考え事をしていた。

『坂井真琴は世界で最も権力が高いと言われる財閥の孫』

初めて克也にそれを言われたときは、正直なぜ冗談を言うのかわからなかった。しかし、実際に今日の朝刊を読んでそれを実感した。昨日、真琴の祖母に当たる人が勝手に会見を開き、真琴を強制的に本拠地のイギリスに連れて帰ると言う。

「俺も詳しいことは知らなかったよ。ただ、事情で親の名前をここには書けない……って言われたから保証人になったんだ。なんかあるってことは坂井先生の態度でなんとなく気づいてたからな」

運転席からミラー越しに弘樹を見る克也。一瞬だけちらっと見ただけで、弘樹はまた俯く。

今真琴が日本にいるのか、すでに別の所にいるのかはわからないが、それでも空港に行きたいという願いだけで向かっていく。

「悪かったな……」

突然の克也の謝罪に弘樹は驚いた。

「なんで謝るんだよ」

「こんなゴタゴタに巻き込まれてなきゃ、もっと早くに坂井のところに行けたのにな」

「別に俺が勝手に首突っ込んだだけだし……克也のせいじゃねーよ」

弘樹はシートにもたれていた体を起こした。ようやく寝不足だった体が元通りになってきた。

「なんで姉ちゃんは克也に告ったんだろう……」

「女心なんだと」

答になっていない返答。しかし、弘樹はそれ以上追及しようとは思わず、疲れ果ててまたシートにもたれかかる。

車のラジオから坂井真琴がすでにイギリスに飛び立ったとのニュ

―スが流れたのはそのときだった。

「ごめん・・・間に合わなかった」

自分のせいじゃないのに克也はうなだれる。弘樹は何も考えずに首をふるふると振った。

「元々年下だから興味ないって言われてたし、行っただけでごめんなさいって言われるだけだから」

「そんなわけないだろ・・・お前、気づいてないだけだ。ちゃんと自分の気持ちを言えば・・・」

「俺はただ・・・」

克也の言葉を弘樹は途中で遮った。

「坂井さんに誕生日おめでとっって言いたかっただけなんだ・・・」

月日は流れていく。

季節は夏にさしかかろうとしていた・・・

「よー弘樹！久しぶり！」

月曜日、大学の授業がたまたま休講になった3限時、ちょうど高校の創立記念日で休みになった克也が大学に遊びに来た。

「ほんと久しぶりだな」

成瀬克也は苦笑しながら食堂で出迎える。

あれから4ヶ月と少し。弘樹と克也は久しぶりに顔を合わせることになる。とは言っても、お互いにたいして変わらない姿に特に感動を覚えることなく席に着く。

それと同時に、周囲の女子の視線が克也に向く。いくら三十路前でも確かにルックスだけは衰えてないらしい。

「やべ・・・大学生生活またやり直そうかな」

「やめとけて。玉木先生に会えなくなるよ」

「その話は反則だろ・・・ただでさえ今会えなくて寂しい人生を送ってたんだから」

嘆くように克也は言うが、急にがばつと起き上がって真剣な面持ちで弘樹を見てくる。

「ってか、俺の話をしに来たんじゃないっての。ようやく連絡が取れたんだ、坂井と」

坂井真琴は日本中の様々な思いを残し、日本から去っていった。

まずは仕事。受けていた仕事は全て断ってしまったらしい。これで、世間の坂井真琴に対する印象が変わった。

元々真琴は財閥の家系に生まれたそうだが、真琴の母が日本で坂井先生と会ってカケオチし、勘当かんとくされた。しかし、その跡継ぎがそるって電車事故に遭ってしまったらしく、急遽最後の跡取りである真琴を連れ戻したとの話だった。

結構勝手な話だ。

「イギリスに研修中の玉木先生が坂井に会ったんだって」

「・・・すげー偶然」

「だな。それで、玉木先生が帰国するとき、一緒に坂井も帰ってるって」

「え・・・!」

思わずがたと立ち上がると、周りの学生に何事か不思議そうに見られた。しかし、そんなことはお構いなしに弘樹は克也に詰め寄る。

あれから真琴とは連絡が取れていない。会うのは久しぶりだった。「今1番会いたくない人は?」って訊いたら弘樹だって言ってたぞ」

真琴の言いそうなことだ。っていうか、本当に会いたくないのかもしれない。少しでも少しかけシヨクだったが、弘樹は落ち着いてずとんと座った。

「………会いたい？」

克也の試すような言い方。答なんてわかってるくせに、本当に性格が悪い。

「会って……文句が言いたい」

精一杯の強がり。しかし、克也はにっこりと笑った。

「お前、俺に似て不器用だからね」

もうすぐ真琴に会えるんだ………！

25 会いたい（後書き）

なんつーか……

弘樹と克也が話ただけで終わった感じがします。

次で最終回です。

たぶん番外編はないと思います。

最終話 年上の彼女は強い

荷物を受け取り、税関、検疫、全ての帰国の手続きを終わらせて、玉木有子は帰ってきた。

いよいよ出口のゲートに向かうだけだというときに、ふといつも少し後ろを歩いていた人物がいらないことに気づいた。

「あれ・・・坂井さん？」

振り返ると、坂井真琴が10メートルくらい後ろで立ち止まっていることに気づいた。慌てて傍へ行つた。

「大丈夫です・・・一緒に行きましょう」

日本の誰とも会わせる顔がないと言つて、帽子に眼鏡をかけた真琴は、一見してもモデルの坂井真琴だとは気づかない。玉木は真琴の心中を察して彼女の顔を覗き込む。

「なんのためにここまで来たんですか」

それを聞いて、真琴はこくつと頷いて歩き出した。

2人はゲートをくぐつた。

そこには、多くの出迎えの人がいた。

玉木は無意識に辺りをきょろきょろと見渡して、ある人物を探す。しかし、なかなか見つからなくて、仕方なく一旦人ごみの中から抜けることにした。

そのときだった。

目の前に菅沼克也が立っていた。

嬉しくて、思わず玉木はがばつと抱きついてしまった。しかし、周囲の目が気になって慌てて離れようとしたとき、克也が背中に戻した手を離してくれないことに気づいた。

「すが・・・ぬま先生・・・」

そして、耳元で呟かれた。

「おかえり」

「ただいま・・・」

なによりも、なによりも嬉しかった。

しばらくして、克也が玉木を離し、後ろにいた真琴に向き直った。

「おかえり、坂井」

「・・・ただいま」

顔を少しだけ上げた真琴が頷く。しかし、克也の傍に弘樹がいな
いことが気になったらしく、無言で克也を見る。玉木も同じ思いだ
った。

しかし、すぐにそれに気づいた。克也の後ろから男の人が歩いて
くることがわかった。真琴がその人物に釘付けになっていることに
玉木は気づいた。

「おかえり」

成瀬弘樹は呟いた。

「そうしたらニコラ先生が本当に現れちゃったんです！もうほんと
にびっくりで！それで、それで」

「はい」

「私たち慌てて・・・ってごめんなさい！私の話ばかり」

そのとき、ようやく自分の話ばかりしていることに気づいて、
玉木有子は慌てて黙り込む。延々とイギリスでの研修話をしていた
のだが、本当に長い時間話していたようだ。いつのまにか外は真っ
暗になっていた。

しかし、その間、克也は嫌な顔一つすることなく玉木の話を楽し
そうに聞いてくれた。

「もっと話してください。玉木先生が楽しいと俺も楽しいんです」

につこり笑ってそんなふうに言われると、恥ずかしくなってくる。こんなに幸せでいいのだろうか。

いや・・・こんなに幸せなのはおかしい。きっと自分の思い違いだ・・・！

と、そんなことを考えている玉木を見て苦笑している克也が目に入った。それだけで、言いようのない感情を覚えた。

そして、気がついたら、玉木は自分から克也にキスしていた。

「え・・・」

お互いに驚いた瞳が至近距離でぶつかる。玉木は唐突に自分がしたことを理解した。

「すすすいません！なんか・・・したくなっちゃって」

しかし、今度は克也のほうからキスをしてきて驚いた。角度を変えてもう1度。

「今日は・・・寝かせないって言ってもいい？」

「はっはい！飛行機の中でいっぱい寝てきました！」

玉木は、克也の冗談とも本気ともつかない言葉を本気の言葉で返した。

弘樹・・・坂井・・・頑張れよ。

同じ頃、坂井真琴と成瀬弘樹は母校の科学室にいた。学校は休みだったが、たまたま部活動が行われており、その関係で校舎の中に入ることができたのだ。

しんと静まり返る教室。ここが2人が出会った場所・・・
「元気だった？」

弘樹からの問いかけに真琴はびくつとなった。何も言わずに日本

を去っていったことを怒っていると思ったからだ。

「元気だったよ・・・そっちは？」

「うん、まあ・・・ぼちぼちだよ」

「あ・・・あの・・・ごめんなさい・・・せつかくY大学合格したのに一緒に通えなくて・・・黙って行っちゃって、ごめん」

ずっと思おうと思っていたことがようやく言えた。許してもらう気などなかったが、それでも淡い期待を抱いて俯き加減に弘樹を見る。

弘樹はしばらく何も言わなかった。ただ、テーブルの上に座って、キーケースを指でもてあそんでいる。

「日本のみんながどう思ってるか知ってる？坂井さんがイギリスに行ったこと」

それは聞きたくないことだった。自分は責任を全て投げ出して逃げてしまったのだ。

「無理やり日本に連れて帰された不幸な女の子だって思ってるよ。たぶん坂井さんが思ってるようなことは誰も思っていないから安心して」

「そ・・・そうなの？」

「うん。だから責任を感じることはないんだ」

その言葉に少しだけ肩の荷が軽くなったように感じられた。真琴はほっとして力が抜けそうになったが、1番言いたかったことを思い出して気を取り直した。

「あのね・・・聞いてほしいことがあるんだけど」

「私、少年に会って・・・最初は生意気な後輩だなんて思ったけど、少年が私の目を見て綺麗だって言ってくれたときからずっと・・・その、気になって・・・なんとか仲良くなりたくて・・・」
支離滅裂に言葉が進んでいく。

恥ずかしい。どんな仕事よりも恥ずかしかった。しかし、勇気を

振り絞って言葉を紡いでいく。

「か、勝手だけど、こんなこと言える義理なんてないんだけど、私・
・弘樹が好きです」

目を閉じて、なんとか恥ずかしさを紛らわせる。ひどいことをしたんだから、断られることぐらい覚悟している・・・つもりだった。けど、ここまでできて断られたらその後どんな表情をすればいいのかわからない。

おかしいな。モデルだったんだから表情作るぐらいいけないのに・
・・・

「俺、不器用だよ？知ってる？」

いきなり予想もしていなかった言葉が返ってきて、真琴は面食らった。彼はそのままこっちに歩いてくる。

「知ってる・・・」

「女心とかさっぱりわかんないよ？」

「知ってる」

「坂井さんより1日後に生まれたんだよ？」

「知ってる」

「俺・・坂井真琴のことが大好きなんだよ？」

目の前で弘樹が立ち止まる。真琴はときどきしながら弘樹を見上げた。

「あ・・それと、俺スケベだよ？」

「知ってる」

付け足された言葉に真琴は苦笑する。それと同時にぎゅっと抱きしめられた。

嬉しくて嬉しくて、涙がとまらなかった。誰よりも優しく、温かくて、大好きな人の背中を、真琴はぎゅっと抱きしめた。

「唯ももう不倫はしないって約束したし・・・まあ一件落着かな」
後日、久しぶりに弘樹と克也は科学室に集まった。

「その後どーよ？玉木先生とは順調か？」

「おう。やっぱ年上の女の人っていいな・・・時々見せるギャップがいい」

「ギャップ？」

「ベッドの上とか」

ああそうかいと適当にあしらった弘樹だが、ふとあることに気づいた。

「そついえば、真琴もちよつと違つたかも」

「ちよつと！！！」

弘樹の言葉のすぐ後に女2人分の声が重なって聞こえた。驚いて声のしたほうを見ると、顔を赤くした坂井真琴と玉木有子の姿があるが、その顔は怒っているように見えた。

「なんてこと言ってますか！！ここは学校です！！」

「わっ！！有子さん、落ち着いてくだ・・・」

「学校では名前で呼ばないでください！！」

ばしーんと容赦なく英語の教科書が飛んできて、慌てて避ける克也。

「弘樹のスケベ！！ほんと子供だよね！！」

「ごめん・・・冗談だつつの！」

反対に、直接攻撃を加えられる弘樹。

ここでの年上の彼女は強かった。

最終話 年上の彼女は強い（後書き）

真琴はたぶん跡を継ぐと思いますが

今は日本で暮らすことをおばあちゃんに許して

もらったんだと思います。だから帰ってきた…？

ハッピーエンドです。

この作品を読んでくださって本当にありがとうございました。

感想をくれた方々…本当に嬉しかったです！

ちゃんと読んでます！励みになってます……！！

これで終了ですが、また機会があったら別の小説で会えることを祈っています。

— 廉 —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8494e/>

年上の彼女

2010年10月11日01時23分発行